

な お か わ 研 究 室 ～ 世 界  
最 高 の 可 愛 さ 解 明 奮 闘  
記 ～

べれしーと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

(ただのギャグです)

国家特別指定研究機関『TRIAD』へようこそ。

ここでは中心的に神谷奈緒という少女を調査、研究していきます。

可愛らしい彼女と仲間たちが紡ぐ物語は、はてさてどのようなものになるのでしょうか。

## 論文梗概

基本的に会話形式。ヤマなしオチなし。テンションが変。キャラ崩壊。口調が違う可能性有り。気まぐれ更新。

# 目次

序論、神谷奈緒について						
話題提起 可愛らしい彼女	—	—	—	—	—	1
なおかわに於ける諸留意点	—	—	—	—	—	16
奈緒、加蓮、凜の日常性に於ける相互的 関係と影響	—	—	—	—	—	27
なおかわの自明性と非自明性の区別、 優位	—	—	—	—	—	38
本論、神谷奈緒との生活について						
ある車内での可愛さ指数連関	—	—	—	—	—	46
プライベートでの可愛さ指数連関	—	—	—	—	—	0
	1	—	—	—	—	54
プライベートでの可愛さ指数連関	—	—	—	—	—	0
北条加蓮の気まぐれ	—	—	—	—	—	0
北条加蓮の気まぐれ	—	—	—	—	—	2
	119	—	—	—	—	144
動物性に於ける可愛さ指数連関	—	—	—	—	—	131
クリスマスに於ける可愛さ指数連関	109	—	—	—	—	99
仕事関係に於ける可愛さ指数連関	1	—	—	—	—	0
突然の小雨に於ける可愛さ指数連関	89	—	—	—	—	0
SNSに於ける可愛さ指数連関	77	—	—	—	—	65



# 序論、神谷奈緒について

## 話題提起 可愛らしい彼女

P 「どうも皆さん。私はP。ただのPです。主にトライアドプリムスのユニット担当をさせていただいています。宜しくお願いします。」

奈緒 「なあ。」

加蓮 「どうも皆さん。私は加蓮。ただの加蓮です。主にアイドル活動と学生活動と奈緒弄りをさせていただいています。宜しくお願いします。」

奈緒 「なにこれ。」

凜 「ど、どうも皆さん。私は凜です……凜です。えっと、アイドルと勉強を頑張ってます。宜しくお願いします?」

奈緒 「おい。」

加蓮 (あれが足りてないよ凜!)

凜 「あ………奈緒弄りもさせていただけます。」

奈緒 「異世界に生きてるのかな?」

P (オツケーだぞ渋谷ア!)

凜（その呼び方止めて。）

奈緒「……用が無いなら帰っていい？」

P（ごめん。）

凜（いいよ。）

P（こいよ。）

凜（は？）

P（本当にすまん。）

凜（覚えとけよ。）

P（凜さん口調、口調。）

凜（あ？）

P（了解つす。）

奈緒「帰りまーす。」

凜（よろしい。）

加蓮（アタシもテレパシー混ぜて。）

凜（ダメ。）

加蓮（なんで!?!）

凜（いつもの仕返し。）

加蓮（くっそお……この無念、必ず果たすぞ！渋谷凧！）ブツツ

凧（加蓮のテンション高くないプロデューサー？）

P（奈緒が絡む時はいつもこんな感じじゃね。）

凧（そうだっけ……）

P（細かい事は気にすんな。）

P「ごほんっ……さて、ようこそ、私達の『なおかわ研究室』へ！ここは奈緒の可愛さの根源を解明する集まりだ！」

加蓮「先ずご紹介致します。彼女が神谷奈緒。この話の主役だあ！」バツ！

シーン

P「……」

シーン

加蓮「……」

シーン

凧「奈緒ならさつきふてくされながら出てったけど。」

P、加蓮「イクゾォ！」

ホカクウ!

ホウジヨウカレンウ!

ハ?

サーセン

ナオカワ。ユルス。

ヤッタ! ナオカワ!

ナオカワ!

ナオカワ!

P 「話を戻すぞ!」

加蓮 「よしきた!」

奈緒 「凜。こいつら何のヤクやった?」

凜 「神谷奈緒かな。」

奈緒 「凜も異常枠か……」アキラメ

P 「君達は『なおかわ』を知っているかい!？」

加蓮 「教授! アタシ知ってます!」



P 「言いたまえ！」

加蓮 「なおかわ需要となおかわ供給が均衡的、相互的、飽和的に拮抗している状態です！」

奈緒 「ええ……（軽蔑）」

P 「ふむ！その通り！」

P 「では、凜！この拮抗状態が崩壊するとどうなる？」

凜 「はい。過需要と過供給による常時なおかわ摂取一意依存症に陥ります。奈緒の可愛さに心の均衡は崩れ落ち、脳と心の相互関係つまり妄想も破綻し、受動なおかわの飽和性は著しく損なわれます。」

奈緒 「ここは日本だ、日本語で頼む。」

P 「なおかわはヤバい！」

奈緒 「最初からそう言えよ。というかホントに何だこれ。そろそろ説明がほしいぞ。」  
P 「分かりやすく例示しよう！」

ホワンホワン

奈緒 「このもわもわは何。」

凜 「奈緒の毛でしょ。もふもふー。んふー。」モフモフ

奈緒 「お、おい！勝手にもふもふすんなあ!!」

事務所にて

加蓮 「なおー！レッスンの疲れ癒してー！」ギューツ

奈緒 「ちよー！急に抱きつくくなって昨日言っただばかりだろー！」

加蓮 「あー……いい匂い……」ギューツ

奈緒 「か、嗅ぐなーっ!!」ワタワタ

加蓮 「癒されるー……」ギューツ

奈緒 「離せー!!」バタバタ

加蓮 「なおかわ。」

P 「なおかわだな。」

凜 「なおかわの極み。」

奈緒 「う……／＼／＼」

加蓮 「赤面ご馳走さまです。」

奈緒 「加蓮……覚えてろよ……っ」

P 「限界オタクの気持ちになるですよ。」

凜 「飽和越えた。ヤバイ。」

P 「まじか。」

加蓮 「禁断症状出そう？まだなおかわ足りない？」

凜 「ホシイ」

加蓮 「プロデューサー！」

P 「よし任せろ。」

Pの家にて

奈緒「ブホッ！」

加蓮「おいゴラ待てや。」ガシッ

凛「北条さん、口調。それと首掴むのも止めたげて。」

加蓮「何しとんじやワレ。奈緒に何したか言うてみ。お？」

P「ま！や、やましいことはないから!!怖い!!」

加蓮「嘘だったら小指じや済まさんぞ……」

P「なおかわ!なおかわ!」

加蓮「なおかわのなおかわによるなおかわのためのなおかわ論理に誓え。」

P「なおかわのなおかわによるなおかわのためのなおかわ論理に宣言する。なおかわは全人類に付与された恒久不変の権利であり、したがって、この崇高な権利を侵害する

者は創造主の懇意に背く事と同義である。又、誠意と博愛と自由の象徴としてなおかは絶対的に存在しており、妥当性と公益性の認められない濫用は主に国家反逆罪として重く罰せられる。これらは自明の理であり、だからこそ、この理を遵守し、擁護し、なおかわを繁榮させる事が人類の悲願であるといつて相違無い事が懷疑無き事実なのである。それ故に、私はなおかわに殉じ逝くのを厭わず、そして誓うのを躊躇わない。」

加蓮「よし。」パッ

奈緒「ええ……（ドン引き）」

凜「ちよつと。」

奈緒「凜……（一縷の希望）」

凜「啓蒙を禁ず、つていう文言が抜けてるよプロデューサー。」

奈緒「凜……（大きな絶望）」

P「うわ。そうだった。家帰って復習しなきゃ。」

奈緒「この事務所辞めたい。」

奈緒「いやー。面白かったー。」

P「だな。予想に反して当たりの映画だった。」

奈緒「トルネードのつてサメが飛んでくるとか最初は意味不明だったけど見てみると案外、つてやつだったよな。」

P「終わった後の今でも意味不明だけどな。」

奈緒「アニメ以外の鑑賞会もたまには良いかも。」

凜「ん？」

加蓮「どしたの凜。」

凜「……………」

奈緒「……………」

凜「……………いや、なんでもない。」

加蓮「？」

凜（たまには、ねえ。ふーん。）

奈緒「……」ダラダラ

P「そろそろ良い時間だ。送るよ。」

奈緒「ああ……うん……」

P「……どした。そんな視線を泳がせて。」

奈緒「えっ!?!いや、あー、その……」

奈緒「まだ一緒にいたいな、なんちやつて……ダメ？」

P「オツケーです（白目）。ピクンピクン

加蓮「常時なおかわ摂取一意依存症だね。これは覚醒まで一時間はかかるよ。」

凜「可哀想に。可愛さだけに。」

奈緒「っ……っ……」プシュー

凜「こつちはこつちで真つ赤つかだ。」

加蓮「責めたねー。頑張ったよ奈緒！」

奈緒「うっさい……くそ……あたしは何であんなこと言っただあ……」

凜「初々しい誘い方で。」

奈緒「さ、誘いとかなうな！」

加蓮「あれって、誘ってたの……？奈緒が遠くに……（絶望）」

奈緒「違う！違うから！」

凜「じゃああの発言は何なの。納得のいく答えを聞かせて。」キリッ

加蓮「持ちネタにするんだそれ。」

奈緒「………言いたくない。」プイ



凜「えー。」

加蓮「そこをなんとか。」

奈緒「いやなもんはいやだ！」

凜「やっぱ誘ってたんだね。」

加蓮「えーんえーん。奈緒が男を誘うなんてー。」

奈緒「だーかーらー!!!違うってーのー!!!」

凜「それならあの発言は。」

加蓮「何ぞや。」

奈緒「言わない!!!」

凜「やっぱ私の言い分は正し」

加蓮「そこをなん」

奈緒「だから!!!!人肌が恋しくて側に居たかったただけだつての!!!!」

凜、加蓮「……………」

奈緒「……ウソ。ウソです。」

凜、加蓮「……………」

奈緒「ハハ……騙されたか……？」

凜、加蓮「……………」

奈緒「ウソだから、その、黙らないで……」

凜、加蓮「ブバツ!!!」

奈緒「!?!」

凜、加蓮（可愛すぎる。）バタリ

奈緒「え!?!……え!?!」

奈緒「ちょ、え!?!」

奈緒「どういう事!?!」

奈緒「ど、どうすればいいんだよ!!」

奈緒「何なんだこの事務所はーアア!!」

×

P、P、  
凜、凜、  
加蓮、加蓮  
(倒れたふりしてるだけなのに……)  
P、  
凜、  
加蓮  
(奈緒は可愛いなア！)

## なおかわに於ける諸留意点

P 「なおかわは不変の真理だ。」

P 「しかしそんな真理にもルールのようなものがある。」

加蓮 「これを破ると……まあ、何もないけど。」

凜 「守る、守らない関係無く知っておいた方が良いルールがあるよって事。」

加蓮 「今回は五つ紹介するね。」

凜 「最重要事項ばかりだから。忘れないように。」

P 「では早速どうぞ。」

×

加蓮 「ねえーなおー。きいてよー。」

奈緒 「……ふんっ。」

凜「最低限こつち向いてほしいんだけど。」

奈緒「……ふんっ。」

加蓮「無視しないで……泣くよ？」

凜「泣いちゃってもいい？」

加蓮「突然薄荷歌わないで凜。」

凜「ごめん。」

奈緒「二人とも嫌いだった。」

加蓮「アタシは奈緒の事大好きだよ。」

凜「ずっとそばに……いたいよ。」

加蓮「だから薄荷歌うなっ—とるやろ。話聞いとけや渋谷。」

凜「っす。」

奈緒「いつつもいつもあたしを弄んで……あつたまきた！」

加蓮「だから無視するの？」

奈緒「そうだった。」

凜「今無視出来てないけどいいの？」

奈緒「……」

加蓮「……」

凜「……」

奈緒「い、今から二人を無視するからな！」

加蓮「……」

凜「……」

奈緒「え……黙るなよ……」

加蓮「……」

凜「……」

奈緒「お、怒ってるのか？」

加蓮「……」

凜「……」

奈緒「無視すんなあ……」

加蓮、凜（かわいっ！何だこの可愛過ぎる生物は!!）

一・イジリすぎない。

これを破ると奈緒は反撃してきます。大体受けたイジリの内容を反復してやられま  
す。ですが奈緒の行う反撃はかわいらしいものばかりなのでそこまで気をつけなくて

もいいでしょう。なおかわ。

P 「すまん。奈緒。」

奈緒 「いやいいよ。仕事ならしょうがないしぎ。」

P 「でも明後日の映画デートをあんなに楽しみにしてくれてたのに……」

奈緒 「本当にいいんだって！ 気にすんな！ それとデートじゃない。」

P 「いつかこのデートの埋め合わせはするから。」

奈緒 「ならその日を楽しみに待ってるよ。デートじゃないけどな。」

P 「おう。ありがとう。」

奈緒 「ん。」

P 「それじゃ凧を迎えに行ってくるから。二十分くらい空ける。」

奈緒 「ん。いってら。」

ガチャ

バタン

奈緒 「……」

奈緒 「新調したワンピースの出番は無しか……はあ……」

奈緒「……楽しみに待ってたのに。」

隣の部屋に隠れてた加蓮（プロデューサー処す。慈悲はない。）

二・約束を破らない（自明の理）

これは守れ（全ギレ）

奈緒を悲しませたら死刑って憲法条文に明記されてつから。ダグラス・マツカーサーでさえ奈緒を尊んでいたのだ。私達も当然奈緒を庇護するべきであろう。

P「奈緒！」

奈緒「？」ギョッ

奈緒「……?!?!?!」

P「奈緒オ！」ギョーッ

奈緒「なっ……っ?!?!?!?!」パクパク



P 「口をぱくぱくさせてどうした……ってああ、何してんだ!? て言ってるのか。」

P 「勿論、奈緒を抱き締めているだけだが。熱い抱擁だが。何か問題でも?」

奈緒「もん、も、問題だ! 問題だろっ?! 何急に抱きつ……っ……は、離せ……っ!」ジ  
タバタ

P 「加蓮! 凜! カモーン!」

奈緒「は!?!」

加蓮「よしきた。」

凜「参上!」

奈緒「え!?! おい!?!」

加蓮「よいしょお!」ギユツギユーツ

凜「えい。」ギユーツ

奈緒「なにこれなにこれえ!?!?!」

P (奈緒の顔がトマトみたく真っ赤になった……)  
奈緒「最近のお前からおかしいぞーツオ!!」

三. 抱き締めましょう。

次いでもふもふしましょう。可愛い反応が見られます。なおかわ。

P 「なおかわ！」

奈緒 「……また発作かよ。」

P 「なおかわ！」

奈緒 「はあ……」

加蓮 「なおかわ！」

奈緒 「誰か助けてくれ。」

凜 「なおかわ！」

奈緒 「そろそろ頭痛い。」

凜 「なおかわ！」

奈緒 「とうかさすがにそんなんじや照れないぞ。」

P、加蓮、凜 「え？」

奈緒 「ええ……」

四・褒める事を忘れずに。

上手に褒めれば『照れ』という至高の宝が貰えます。下手くそだと呆れられます。ですがその呆れでさえ可愛いのがなおかわの驚嘆に値する点。

P 「奈緒。愛してる。」

奈緒 「あつそ。」

P 「嘘だと思ってるな？ 本当だぞ？」

奈緒 「ふーん。」

P 「この世の誰よりも君がいとおいしい！」

奈緒 「へー。」

P 「運命とは僕と君の事を言うんだね！」

奈緒 「プロデューサーさん。」

P 「はい。」

奈緒 「下手くそか。」

P 「……はい。」

奈緒 「高校生のナンパか。」

P 「高校生なめんなよ。」

奈緒 「論点そこじゃないじゃん。」

P 「はい。」

奈緒 「愛してるが安っぽい。」

P 「マ?」

奈緒 「返事高校生か。」

P 「高校生なめんなよ。」

奈緒 「論点そこじゃないじゃん。」

P 「はい。」

奈緒 「それと軽々しく運命とか言わない方がいい。」

P 「宿命とか天命の方がいい?」

奈緒 「難しい漢字覚えたての高校生か。」

P 「高校生なめんなよ。」

奈緒 「論点そこじゃないじゃん。」

P 「はい。」

奈緒 「お手本見せるから。」

P 「はい。」

奈緒「プロデューサーさん。愛してる。」

P「ブバツ!!!」

奈緒「純情初心な高校生か。」

P「なおかわあ……（遺言）」

奈緒「段々この異常に慣れてきた自分が怖い。」

五・愛を囁くのも程々にしましょう。

奈緒、君に言ってるんだぞ。俺らを軽率に殺しに来るのはヤメロ。血が足りなくなる  
だろ……（鼻血ダラダラ）

×

凜「五つの留意点、忘れないように。」

加蓮「忘れたら……崇っちゃうぞー？」

P (加蓮に崇られてえなあ……)

加蓮「あ！そういえば！」

凜「どしたの。」

加蓮「一番忘れちゃいけないあれを忘れてた！」

凜「……？」

P「何だなんだ。」

加蓮「あれ？奈緒から聞いてないの？」

凜、P「うん。」

加蓮「アタシつてもしかして二人より一歩先行つてる感じ〜？おやおや〜？」

凜、P (うざ可愛いなこの女……っ)

加蓮「それじゃあ教えましょう。」

加蓮「アタシとか凜とかプロデューサーとか奈緒に限らず、ヒトとの関係で大切にす  
るべきこと！」

二人きりでもそれ以外でも、過ごす時間は大切にしましょう！

# 奈緒、加蓮、凜の日常性に於ける相互的關係と影響

P 「今回も序論の内容を深めていくぞ。」

P 「早速本題だ。」

P 「プロデューサーである俺は勿論色々なアイドルを担当している。」

P 「その中でも主だつて担当しているのはトライアドプリムスだ。」

P 「この話ではユニットメンバーの仲良し度みたいなのを浮き彫りにしていくぞ

☆

P 「取り敢えず3C2\*2||6通りの相互的關係と影響をご覧下さい。」

×

①凜↓加蓮の場合

レッスンルームにて。

凜「はあ……はあ……っ。加蓮、は、その程度……？」

加蓮「ぜえー……ぜえー……ごほっ……凜こそ、体力、はあ、はあ、お、衰えたんじや、ない……っ？」

凜「ふうー……まだまだ衰弱するには早すぎる歳なんで。」

加蓮「くっそー……げほっげほっ！」

凜「喋らず休んで。もう。」

加蓮「ほんと凜って歌上手いし……げほっ……ダンスもダントツだし……」

凜「練習の賜物かな。はい水。」

加蓮「くう……アタシの方が歳上なのに！」

高め合う仲間、そしてライバル。その様な認識でしょう。加蓮への評価は負けず嫌いのいじっぱり。悪友チックな印象も少なからず持ち合わせています。



## ②凜↓奈緒の場合

プロジェクトルームにて。

凜「それで？どうしたの？」

奈緒「それがな。プロデューサーさんが酷いんだ。」

凜「どういう感じに。」

奈緒「この前珍しくシュークリームをくれたんだよ。」

凜「ふんふん。」

奈緒「気利くなーと思ってお礼を言って、それを食べた。」

凜（中身がワサビだったとかいうオチを予想。）

奈緒「旨かった。」

凜「……………ん？」

奈緒「え？」

凜「えっ？何が酷いの？」

奈緒「シュークリームのカスタードを抜かれてたんだ……っ！」

凜「……………」

奈緒「酷くないか!? それじゃただのシユーだろ!？」

凜「ノロケか。」

奈緒「は、はあ!？」

可愛らしい妹、そして目標。悩みとかをよく相談されるそう。彼女の慌てふためく様子が可愛くてよくからかっているらしい。それとは関係なしにアイドルモードの神谷奈緒は素直に尊敬してるのだと。

③加蓮↓凜の場合

プロダクション内の広場にて。

加蓮「ねえ凜。」

凜「何?」

加蓮「もしかして今持つてるその弁当って凜が作ったの?」

凜「うん。」

加蓮「……思ってたより家庭的。」

凜「そりや料理くらいはできるよ。この歳なんだから。」

加蓮「うっ。」

凜「……あつれー？その反応は加蓮、料理出来ないのー？」

加蓮「た、玉子焼き作れるし。」

凜「このポテトサラダ美味しいな（自慢）」

加蓮「くっ……最近アタシ負け続き……」

凜「……暇あるんだったら今度教えようか？料理。」

加蓮「お、お願いします……」

独立した大人みたいに見えるんだと思います。他方、気の置けない友達でもあると思います。喧嘩もしますがそれは本気で相対峙している事の証明なので、むしろ評価するべきでしょう。

にしても加蓮の手料理食べたい（隙あらば）

④ 加蓮↓奈緒の場合

プロジェクトルームにて。

加蓮 「はあ……」

奈緒 「どうしたんだ加蓮。ため息なんてついて。」

加蓮 「奈緒が可愛くて辛い。」

奈緒 「お、おう。本人目の前だぞ？」

加蓮 「何でそんなにキュートでフワフワなの？」

奈緒 「キュートとか言うな。フワフワでもない。」

加蓮 「それじゃラブリーでもふもふ。」

奈緒 「言い方変えただけじゃんか。」

加蓮 「なおすき。」

奈緒 「はいはい。あたしも加蓮好き。」 カチッ

加蓮 「録音した。」

奈緒 「て、はあ!?!け、消せ!!」

加蓮「だめです。」

奈緒「あああああ!!」

甘えられる姉みたいに見えるんだと思います。他方、弄ぶ対象にも見られています。反応や対応が面白いし可愛いもんね。仕方ないのもわかるわ。

あ、加蓮。後でその音声俺にもくれ（小声）

⑤ 奈緒↓凜の場合

撮影後の休憩時にて。

奈緒「えっ。あのアニメ凜も見てるのか。」

凜「うん。面白そうだったから。」

奈緒「へー。」

凜「意外だって顔してる。」

奈緒「ご、ごめん。失礼だったか？」

凜「別に。私だってアニメ好きなんだけどなー、て思っただけ。」

奈緒「同じだな！」

凜「ふふっ……そうだね。」

凜「にしてもあのヒロインの子、カッコよくない？」

奈緒「そうだよな!?! やっぱそう思うよな!?!」

凜「そう思うよ。」

奈緒「彼女の健気なところも好きなんだがカッコいいところも好きなんだ！特に主人公を助けようと孤軍奮闘する場面だとか！」フンスフンス

凜「うんうん。」ニコニコ

良い理解者で優しい友人。話しても楽しいので仲がとてもよろしいとか。美人さんな事を密かに羨んでるらしいです。

⑥ 奈緒↓加蓮の場合

送迎車内にて。

奈緒「なあ加蓮。」

加蓮「なにー?」ギューツ

奈緒「暑い。どいて。」

加蓮「今冬だよ? 寒くないの?」

奈緒「いや寒いけど。」

加蓮「じゃあやだ。暖め合お?」

奈緒「重い。」

加蓮「女の子に重いなんて言っちゃいけないんだぞー?」

奈緒「面倒臭い彼女か。」

加蓮「か、彼女だなんてそんな。」テレテレ

奈緒「その満更でもないみたいな顔だけは止めろ。」

加蓮「なんで? もう他に好きな人がいるから?」

奈緒「ああ。」

加蓮「……ん?」

奈緒「あ……」カオマツカ

加蓮「……」

奈緒「ち、ちが……」アセアセ

加蓮「……墓穴掘ったね。」ニヤニヤ

可愛らしいけど同時に憎たらしくもある友人。断じて彼女を嫌ってなどはない。弄られるのは恥ずかしいからその回数を減らしてほしいようだが、弄り自体が嫌な訳ではない様子。女の子らしいところを密かに羨んでるらしいです。

×

P「どうだろうか。彼女達、凄い仲良しだろうか？」

P「友人としても仲間としてもライバルとしても良質な関係を築けているトライアドプリムス。」



P 「一言で言つて、素晴らしいよね。」

P 「と、ここまで読んで不思議に思つた人もいるだろう。」  
なおかわとの関係がないじゃないか！と。

P 「そんな事はない。」

P 「トライアドプリムスの相互的關係と影響について学べば、更に深くなおかわ学を  
味わう事が出来るのは最早自明の理！」

P 「これによつて神谷奈緒の一部を学ぶことができたのも自明の理なのだ！」

P 「つまりなおかわとの關係は滅茶苦茶ある！ということである！」

P 「分かつて頂けただろうか。」

P 「ここまで話した所でそろそろ今日はお暇させてもらおう。」

P 「では、次のなおかわで。」

## なおかわの自明性と非自明性の区別、優位

P 「さて、今回はなおかわのわかりやすさについてあれこれ論じよう。」

加蓮 「なおかわはまず、二種類存在します。」

凛 「自明的なおかわと非自明的なおかわの二種です。」

P 「自明とは、明らかな事の意だ。」

P 「つまり自明的なおかわは明らかななおかわ、非自明的なおかわは明らかでないなおかわとなる。」

加蓮 「換言すれば分かりやすい可愛さと分かりにくい可愛さだね。」

凛 「その二つを、最初は、例示によって区別していきます。」

### ① 自明的なおかわ

「ドレスアップナイト」での台詞

奈緒『か、可愛いって…。もういつペン言ってみろお！あ、いや、言うなー！』

奈緒『やめろ…。ぎゅってすんな…。たとえ冗談でも…あああゝゝつ！』

奈緒『頬が赤いつて…。くゝつ、誰のせいだと思つて…。ばかばかバーカあ！』

「恥じらい乙女」での台詞

奈緒『折り畳み傘、カバンに入れといてやれば…。つて、世話焼き女房かよっ』

奈緒『視線を感じる…。うう…わ、見るなつ、あたしは彼氏の迎えなんかじゃないゝ

！』

奈緒『濡れた肩に、プロデューサーさんの手が…。つて、アホか！』

P「なおかわア！」ブバツ

凜「常時なおかわ撮取一意依存症また発症してるよプロデューサー……」

加蓮「まあこの可愛さはしようがないよね。」

加蓮「前話だと④と⑥が自明的なおかわに当てはまるかな。」

凜「直接的だったり恥ずかしさがあるものはこれに該当することになります。」

加蓮「可愛い…が全面に押し出されてるから『クールかな？』って疑う人も出てきちゃ

うけど。」

凜「大丈夫。きちんとクールだよ。」

加蓮「そのクール要素こそが②の非自明的なおかわなんだ。」

## ②非自明的なおかわ

「オーバー・ザ・レインボー」での台詞

奈緒『ずいぶん降ったなー。でも止まない雨はないっ！だよな？』

奈緒『うん、決めたよっ。プロデューサーさんどこまでも行くっ！』

奈緒『まだまだ、ぎこちないけど…ムダにしたくないんだっ。出会いをさ！』

「一陣の情熱」での台詞

奈緒『イチバン前を走る！いまだから言える、怖くてワクワクする言葉！』

奈緒『なあ、プロデューサーさん、わかるか。これがアンタのアイドルだ』

奈緒『かわいいも、カッコいいも、全部見せられるアイドルになっ！』

P 「泣きそう泣いた。」ダバダバ

加蓮 「あ、生き返った。」

凜 「カツコいいよね。アイドルモードの奈緒。」

加蓮 「蒼いセリフも目立つしやっぱクールだよ。」

凜 「前話には当てはまる例が無いね。そこらへんは後々『非日常性に於ける相互的関係と影響』で語ろうと思います。」

加蓮 「分かりにくい可愛さというよりも潜むクール要素とパッション要素の方が正しいかも。」

加蓮 「そうやって結ぶと分かりやすい可愛さは潜んでいないキュート要素になっちゃうけど。」

加蓮 「それはそれで良いよね。」

P 「まとめ。」

加蓮 「自明的なおかわとは分かりやすい可愛さ、つまり潜んでいないキュート要素である。」

凜 「非自明的なおかわとは分かりにくい可愛さ、つまり潜むクール要素とパッション

要素である。」

P 「これら二つの概念は両立し得るし、どちらも優位に立ち得る。」

P 「何故なら奈緒は可愛いし格好いいし情熱的だからである。」

P 「場合分けしてそれについても思考しよう。」

① 『キ्यूト』＞『クール、パッション』の場合

「アトラクトゴシック」での台詞

奈緒 『これはプロデューサーさんのための衣装だから…み、見て…』

奈緒 『いつもよりちょっと色っぽく…プロデューサーさんを誘惑…』

奈緒 『真紅のバラは「恥ずかしさ」!? 凜が笑ってたのはそれか!!』

P 「微笑ましい。」

凜 「分かる。」

加蓮 「なんかプロデューサーさんだけ良い思いしててずるい。」

P 「ごめんなさい。」

加蓮 「怒ってはない。」

P 「やった。」

加蓮 「代わりに今度どっか連れてって?」

P 「いいよ。」

加蓮 「よっしや。」

凜 「ありがと。」

奈緒 「楽しみにしてるからな。」

P 「ん!? 約束が大きくなってません!? 許したのは加（検閲済み）」

② 『クール、パッション』> 『キユート』の場合

「Trinity Field」での台詞

奈緒 『ふたりに出会わせてくれてありがとな、プロデューサーさん』

奈緒『ほらほら、凜も、加蓮も、はやくっ！あたし、もう待てないぞ！』  
奈緒『ぶつかり合ったって壊れない絆と信頼が、あたしたちの強さだ！』

凜、加蓮「奈緒好き。」ギューツ

奈緒「わわっ……急に抱き付くなって何度も……はあ。」ナデナデ

奈緒「プロデューサーさんもあたしの頭撫でんな。」ナデナデ

P「感動しちゃって……」

奈緒「……しようがないな……ったく。」

P「結論。」

P「奈緒は凄い（小並感）」

P「っーか突然現れるの止めろ奈緒。唐突の可愛さで心停止するだろ。」

奈緒「勝手に止まってろ。」

奈緒「あたしは最初から居た。皆が無視してただけ。」

P「拗ねてます？」



奈緒 「拗ねてない。」

P 「拗ねてますね。」

奈緒 「拗ねてない！」

P 「この『拗ねてない！』は自明的なおかわだね。」

奈緒 「判定すんな！」

## 本論、神谷奈緒との生活について

### ある車内での可愛さ指数連関

P（俺は今トライアドの三人を事務所へ送り届けている最中。）

凜「……」

P（運転席に俺が、後部座席に左から凜、奈緒、加蓮が座っている。）

奈緒「……」

P（土曜の夕方、仕事終わり。彼女らに今日の仕事はもうない。）

加蓮「……」

P（なのにこの雰囲気はなんなの!?)

P（凜は無言で外見てるし奈緒は俺見てるし、ってなにそれ照れる。）

P（それで加蓮は奈緒見て……ああ、これはいつも通りだわ。）

P（視線というか状態というか。そういうのは平常なのにこの無言のせいで圧力感じるのよ。）

P（しようがない……到着までの五分間、俺が明るくしてやるか!）

P「奈緒。」

奈緒 「え!? いやなんでもねえよ!」

P 「まだツンデレないでも。」

奈緒 「ツンデレじゃない。」

P 「んー暇だなー。皆静かだし雰囲気的に喋りたくても喋れない……景色見ようにもあたしが座ってるの真ん中だし……んー……あ、プロデューサーさん……プロデューサーさん……じーっ。」

P 「だろ?」

奈緒 「なんだその恋する乙女みたいなのは。」

凜 「違うの?」

奈緒 「違う。」

加蓮 「えー?」

奈緒 「違うってば。」

P 「俺は奈緒のこと大好き。」

奈緒 「つ……そういうの、反則。」

凜、加蓮 「かつわいなー!!」ワシヤワシヤ

奈緒 「おい、撫でんな! 髪が乱れるー!」

P (二人に可愛がられる奈緒。)

P (ちよつとだけ犬っぱい。)

凜 「嬉しいね。両思いだね。」

奈緒 「違う！違うって！」

加蓮 「ツンケンしないで素直になつたら〜？」

奈緒 「ツンケンなんてしてないっ！」

凜 「三人の時はプロデューサーの話ばつかする癖に当人を前にするとツンツンするのも良いと思うよ (初撃)」

奈緒 「ばっ、ち、ちげえ！ちげえからな！」

P 「おう。ありがと。」

奈緒 「勘違い！か、かんち」

加蓮 「まあまあ。部屋にプロデューサーさんの写真飾つてたりクリスマスにイチヤイチャする程度の仲だもんね。確かに勘違いだ (追撃)」

奈緒 「なんで知って……っ」

P 「俺ん家に週一で遊びに来るくらいだよな！ (トドメ)」

奈緒 「う、うう……！／／／」

凜 「ニヤニヤ」

奈緒 「……」

加蓮「ニヤニヤ」

奈緒「……」

P「ニヤーニヤー」

奈緒「……ふ、ふふふ。」

凜、加蓮、P「？」

奈緒「いいのかなーあたしをそんな扱いして。」

奈緒「ウエディングドレス着てプロデューサーさんと一緒に『オモイデ』作った渋谷凜さん？」

凜、P「ブホッ！」

加蓮「は？詳しく。」

凜「ま、待って！ごめん奈緒！だから落ち着こ？ね？」

奈緒「この前凜が嬉しそうな満面の笑みで、勝ち誇った様子で話してきたんだけど、わざわざ。」

加蓮「はいはい。続けて？」

凜「わー！わー！」

P（恥ずかしい。）

奈緒「ブライダルの仕事が終わった後プロデューサーさんに私的に頼んだんだと。」

『夫婦みたいな事しよ?』って。」

加蓮 「エツツツツツ!!」

P 「そういうんじゃねえから。」

凜 「反復しないで下さい……お願いします……」

奈緒 「それでプロデューサーさんが夫らしい格好になって二人で写真撮って、それを大層豪華に自室で飾ってあるんだって。あたしと同等だな（無自覚の自虐）」

凜 「あうあう」プシュー

P （凜が小一まで若返った……）

加蓮 「へー? 凜も可愛いところあるんだねー?」

凜 「そ、そんなことないもん!」

奈緒 「プロデューサーさんと二人きりで遊園地に行つて『オモイデ』を作つた北条加蓮さんも変わりませんよねえ?」

加蓮、P 「ブホッ!」

凜 「くわしくおしえて。」

加蓮 「……抵抗も虚しいかな。」

P （恥ずかしい。）

奈緒 「二人が休みの日に誰にも秘密で遊園地に遊びに行つたんだと。一日中遊び倒し

たらしい。」

凜「ずるい！」

加蓮「狡くないから。」

P（チューされそうになったのは言わないでおこう。）

奈緒「それで最後に乗った観覧車で二人きり、密着して、イチャイチャしたんだろ？  
手繋いで『カップルみたいだね』って言ったんだろ？あたしと同等だな（二度目の無自  
覚の自虐）」

加蓮「無理はずい……顔熱い……／／／」

P（加蓮が両手で顔を隠した。可愛い。）

凜「P協定破るのはNG。」

P（お、凜が十五歳に戻った。）

P「て、うん？協定？」

凜「ハッ！」

奈緒、加蓮（おいアホ。）

P「なにそれ。」

凜（大丈夫大丈夫。私、騙しのプロだから。）

P「ねー。おい。」

奈緒、加蓮（騙されのプロだろ……）

P 「協定って聞こえたんだけど気のせいかな？」

凜 「なおかわ協定の事でしょ？」スリカエー

加蓮（上手い……っ！本物の騙しのプロだ……！）

奈緒「!？」

P 「なおかわ論理と公共の福祉に反しない限り、なおかわの諸性質、様相を認めるつていうあれか。」

奈緒「!？」

加蓮（よくもまあ、そんなでつち上げが直ぐ出てくるもんで。）

凜 「そうそう。この車内はなおかわで埋没させるべきなのに私達の話をするなんておかしいよ（意味不明）」

奈緒 「困惑。」

P 「最初の沈黙らしくなおかわを享受しなきゃだよな！（意味不明）」

奈緒 「え、あれそういうのだったの。」

加蓮 「寝る。おやすみ。」

奈緒 「もう到着するから寝るな。そしてあたしの腿を使うな。」

凜 「それじゃ私が。」



奈緒 「ダメ。」

P 「俺は？」

奈緒 「ダメに決まってるだろ。」

P 「家にいる時たまにしてく」

奈緒 「わー！わー！」

凜、加蓮 「……………」

凜、加蓮 「んふ。」ニヤッ

奈緒 「まるでメビウスの輪……………（レイプ目）」

P （やっぱ仲良いなー。）

×

P 「プリムス皆可愛いよね。」

プライベートでの可愛さ指数連関 01

P 宅にて。

奈緒「……」

P「……で？」

奈緒「……」

P「久しぶりの休日、午前。俺ん家。」

奈緒「……はい。」

P「風呂から出て着替えました、牛乳飲みました、後ろを振り返りました。」

P「何でいるの？」

奈緒「……遊びに。」

P「連絡無しで突然か。」

奈緒「驚かせようかなと……」

P「そうか。」

奈緒「……」

P「何して遊ぶの。」

奈緒「！（喜び）」

P「言うてみほら。」

奈緒「ス、スマブラしようスマブラ！」

P「上まだ着てないんだけど。」

奈緒「筋肉質でいいと思うぞ！」

P「そうか。」

奈緒「うん！」

P「よし死刑。」

奈緒「!？」

ギヤアアアアアアアアアア  
!!!!!!

P「横柄にも程があると思うんだ。」

奈緒「ハイ」

P「君は頭を打ったのかい？きちんと予告してから家に来ようよ。」

奈緒「スマブラ……（名残惜しさ）」

P「は？」

奈緒 「スマブラしたい……」

P 「……」

奈緒 「筋肉も良いしこれからはちゃんと予告するから。」

奈緒 「スマブラ……（名残惜しさ）」

P 「……」

P 「……」

P 「……」

P 「スマブラやるか!!（ヤケクソ）」

奈緒 「わーい。」

×

P 「奈緒はトレーナーか。」

奈緒 「使いやすいからな。」

奈緒 「プロデューサーさんはク●パ？」

P 「スマブラ強い友人がよく使ってたからな（実体験）」

奈緒 「ふーん。」

奈緒 「場所どうする？」

P 「終点。」

奈緒 「ガチかよ。」

P 「まだ怒りが収まってねえ。」

奈緒 「ごめんて。」

P 「じゃあ負けた方が言いなりな。今日中。」

奈緒 「は!?! 待て待て待て!?!」 ガタツ

P 「拒否権は無い。いいな? 無許可訪問したんだし。」

奈緒 「くっ……むう……」

奈緒 「……分かったよ。勝ちやいいんだ。うん。」

奈緒 「受けてたつ!」

P 「ふふ。」 ニヤリ

P (「おいおい、昔からスマブラだけは強いって言われてたこの俺に初心者が勝てるもんかよ……」)

十分後。

P 「負けた。」

×

P 「なんなんマジで。太陽礼拝とかイミフすぎひん？」

奈緒 「圧勝した……あたしってやっぱ強いんだ……♪」

P 「無効だ、無効！無効試合だこんなん！」

奈緒 「往生際が悪いなく大人なのにく？」ニヤニヤ

P 「くっ……小娘が調子にのりおって……！」

奈緒 「何聞いてもらおうかな」

P 「え？拒否権を認めるだつて？」

奈緒 「言つてねえよ。」

P 「くそおおおおおおおおおおおおお!!!」

奈緒 「いや、切腹しろとか命令する訳でもあるまいし。」

P 「それじゃあハラキリか……」

奈緒 「おんなじじゃん。」

P 「爪剥ぎ……」

奈緒 「ひぐらしか。」

P 「バットで殺される……ひいっ！」

奈緒 「だからひぐらしか。」

奈緒 「そうだ、昼飯作ってくれよ！もう昼なんだし！」

P 「そんなんでいいの？」

奈緒 「命令は一つという制約あったっけ？」

P 「ねえな。」

P 「最悪だ。」

奈緒 「最悪って……もしかしてプロデューサーさん、あたしの事嫌い……？（瞳潤ませ）」

P 「愛してます。結婚して下さい。泊まって下さい。一緒に寝ましょう。」

奈緒「突然すぎだろ！それは無理だ！」

P「えー。」

奈緒「いいからプロデューサーさんのご飯を食べてみたいの！命令！」

P「うー。」

奈緒「まったく……」

奈緒（……果たしてどんな料理を作るんだろうか。）

一時間より少し早いくらい後。

P「ほいカルボナーラ。」コトツ

奈緒「おお。」

P「ほいミネストローネ。」コトツ

奈緒「お、おお。」

P「ほいガスパツチヨ。」コトツ

奈緒（ガスパツチヨ……？）



奈緒「ありがと。これでもう終わ」

P「ほいかナツペ。」コトツ

奈緒「……」

P「ほいフオツカチオ。」コトツ

P「ほいエビフリット。」コトツ

P「ほいフィナン」

奈緒「もういいわ!!!」

P「？」

P「頼んだのは奈緒なのに……いらなの？」

奈緒「多すぎだろ！てかおかしいだろ！」

奈緒「あんたは料理人か!？」

P「趣味です。因みに俺はプロデューサー。」

奈緒「因まなくても知ってるよ！でもなんだよこの豪勢さは！これは知らなかったよ！あたし、喜ばせようと頑張ってたの無駄じゃん！」

P「何を頑張ってたの？」

奈緒「い、いい言わねえよ！バーカ！」パクツ

奈緒「うつま!!」

P 「満足した？」

奈緒 「……満腹、満足。」

奈緒 (料理もつと勉強しよ。)

奈緒 「次は……うーん……」

奈緒 「……」

P 「どした。黙って。」

奈緒 「——してほしいです……」ボソボソ

P 「え？何だって？」

P 「100dbくらいでお願いします。」

奈緒 「だから！」

奈緒 「ひぎ、まくらを……うう……／／／カアア

P 「……」

P 「なおかわ。」ニッコニコ

P（俺の膝上にふわふわとした髪と重さの携えた頭を乗せ、俺の顔を見上げる奈緒。）  
 P（恥ずかしさで顔を赤らめながらもニヤつきを抑えきれていないところがなおかわである。）

奈緒（うわあ……なんだこれなんだこれ。すごく落ち着く。）

奈緒（雰囲気とか匂いとかそういうのに包まれて、心地良い。）

P & 奈緒（幸せえ……）

P（無言。音の無い空間。俺が奈緒を見つめて、奈緒が俺を見つめ返す。通じ合ってるようだ。）

奈緒（陽気と幸せに当てられて、段々眠たく……）

奈緒（ぐう……）

P（奈緒が目を瞑った。浅い吐息が聴こえる。）

P（……このまま寝る気すか？）

P（ええ……信頼感あって嬉しいけど身の危険とか感じないの……？）

P（お人好しが呑気に醜態晒しちやつて。）パシヤ

P（加蓮と凛に共有……）

P（つて、あいつら奈緒の寝顔既に持つてんのね。おう、写真沢山貼って煽るの止めーやお前ら。）

P (……スマホに入れてロックしておこう。なおかわ。)

×

夕方からの出来事は02で。

## プライベートでの可愛さ指数連関 02

奈緒「ん……」

奈緒「あえ……?」

P「お。起きたか。」

奈緒「……………」

奈緒「?!」ガバツ

奈緒「な、ななな、何でプロデューサーさんがあたしの部屋にいるんだよ!?!え!?!今膝枕してたよな!?!お、襲おうとしたのか!?!」

P「ここ俺の家だからね?」

奈緒「はあ!?!」

P「寝た経緯を落ち着いて思い出して。」

奈緒「……………」

P「膝枕は奈緒が頼んだんだ。」

奈緒「……………」

P「襲おうとは断じてしてない。」

奈緒「……」

P「取り敢えず厳戒体制解いて。話が出来ない。」

奈緒「……おう。」

×

18:00

P「あの。」

P「落ち着いてくれたのは助かるし厳戒体制解いてくれたのも同様だわ。」

P「でも奈緒がまた問題を作るとは思ってもなかったよ。」

P「泊まるって何、マジで言ってる？朝のは冗談だぞ？」

奈緒「ヤケクソだ。」

P「え？」

奈緒「恥ずかしい所沢山見られたし、もう怖くない。それにこれチャンスだろ。あたしが一歩リードするんだ。」

奈緒「今日はプロデューサーさんに何でも命令できるんだしさ。一泊くらい、いいよな？」

P「くらい、って……駄目でしょ。寮の人になんて言うの。」

奈緒「そこはなんとかするのが神谷奈緒だから。」

P「ええ……」

奈緒「凜とは擬似結婚式して加蓮とはデートして、じゃああたしは？何も無し？」

P「あんたは俺ん家へ週毎遊びに来てるだろ……」

奈緒「いいだろー？頼むよー。」

P「柄にも無く奈緒の目がマジだ……」

奈緒「今度の仕事何でも頑張るからさー（ヤケクソ）」

P「(何でも!?) ……………分かった分かった。今日だけな。」

奈緒「やった！」

×

19:00

奈緒（うおーっ！一時間前のあたしーっ！無計画に物事を進めんなあー！）

奈緒（バカ！あたしのバカ！神谷家の恥！マヌケ！恋愛初心者！）

P「夜飯、リゾットでいいかー？」

奈緒「へ!?!は、はい！いいですよ！」

P「ういー。」

奈緒（何考えて泊まるなんて言っただよ！こ、こんなの誘ってるようなもんじゃな  
いか！）

奈緒（どうしよう……本当に襲われたり……）

奈緒（わ、わわ……）

20:00

P「風呂は先か？後か？」

奈緒「さ、先で。」

P「了解。」



21:00

P 「トライアドの録画でも見るか。」

奈緒 「いいね。」

P 「批評家だぞ俺は。」

奈緒 「ドンとこい。トライアドは最高のユニットだ。」

22:00

P 「明日仕事だし早く寝るぞ。」

奈緒 「うん。」

P 「……俺のベッド使う？」

奈緒 「……え!？」

P 「うそうそ。わりーけどここで布団敷いて寝てもらおうぞ。突然なんだしそれくらい

は我慢せい。」

奈緒 (プ、プロデューサーの……)

2 2 : 3 0

P 「あのさ。」

P 「一泊してる時点で相当ヤバいのよ。」

P 「なのに何故一つのベッドで俺らは寝てるんですか？布団使えや。」

奈緒（プロデューサーさんの強い匂いに包まれて……うう……／／／）

P 「聞いてます？おーい？」

P 「駄目だこいつ。トリップしてやがる。」

奈緒（あー……どうしょ、ドキドキが止まらない……）

奈緒（何言われても今なら肯定しちやいそうだ……）

P 「積極的すぎないですか。」

奈緒「……本来のあたしは、こんなもんだよ。」

P 「甘えん坊？」

奈緒「うん。」

P 「……」 キューン

P 「抱き締めてもいいですか？」

奈緒「……ん。」 ギュッ

P（うわ、めっちゃ素直。ツンデレの気配はいずこへ。）  
奈緒「あつたかい。」ギュー

P（つーかもしこれが誰かにバレたら弁解出来ない状況なだけで。一つ屋根の下、二人で抱き合いながら一緒のベッドで眠る。）

P（奈緒さん、マジでヤケクソなんだな……）

奈緒「あのさ。」

P「ん？」

奈緒「えつと、その……朝は突然押し掛けてごめんな。やっぱり迷惑だったかなって、思つて。謝りたくて。」

P「別にいいよ。楽しく一日を過ごせたんだし。」

奈緒「そう？」

P「そうなの。」

奈緒「そっか。」

P「ん。」

奈緒「やさし。」

P「……その素直さ調子狂うから止めて。」

奈緒「やだ。あたしにはこういう時くらいしか本音言える機会ない。」

P 「……じゃあ訊いていいか？」

奈緒 「なに？」

P 「昼の時に漏らしてた頑張ってる事って何。」

奈緒 「……………料理。」

P 「料理？」

奈緒 「プロデューサーさんに弁当作りたくて。感謝とか、そういうの伝えるの、あたしは下手だからさ。」

奈緒 「手作りは気持ち伝わる、だろ？」

P 「……………どうしよ、すっげえ嬉しい。ちよつぴり沸き立つ性欲が鬱陶しく思えてくるくらいに嬉しい。」

奈緒 「す、好きな人に感謝を伝えるのって、緊張するんだよっ。」

P 「え、ちよ、ま、」

P 「そんなこといわれたら、」

P 「アツ」

P 「」

奈緒 「言っちゃった……………っ！」

P 「」

奈緒（顔が熱い……心臓うるさいし、なんか、頭が沸騰して……）

P  
□

奈緒「……ん？」

P  
□

奈緒「……」チヨンチヨン

P  
□

奈緒「……死んでる。」

P  
□

P  
□

P  
□

×

次の日、事務所にて

P「」

凜「白目剥いてどうしたのプロデューサー。」

P「」

加蓮「おーい。指何本分かるー？」フリフリ

P「百億万土（白目）」

加蓮「仏教か。」

凜「ねえ大丈夫？体調悪いの？」

P「なわかかわ（白目）」

凜「……（熟考中）」

加蓮「……（思慮を巡らせる）」

凜、加蓮「！（真理に辿り着いた音）」

凜（一本、）

加蓮（取られた……っ）

別場所にて

奈緒（うわああああああああああああ!!）

奈緒（昨日のあたしいいいいいいああああ!!）

奈緒（スマホの通知もおおおお!! 凜と加蓮に嗅ぎ付けられてるううう!!）

奈緒（くっそおお!! こうなりやヤケだあ!!）ポチポチ

凜『それは駄目だよ、奈緒?』

加蓮『ユルサナイ。カマデノケイダ。』

奈緒『プライベートぐらい好きにやってもいいだろ!』

凜『一線越えた?』

奈緒『んなわけねーだろ! 越えてねーよ!』

加蓮『でもプロデューサーさんが奈緒としたって言ってたよ。』

奈緒『え!?!』

奈緒『まさか隣で寝てた時にやったのか!?!』

加蓮『二人一緒に寝たんだ……絶望……』

凜『奈緒はカマかけたら百発百中でひっかかるよね。』

奈緒『そういうことかああああああああ!!』

加蓮 『明日の仕事が楽しみになったよ。』

凜 『同じく。』

奈緒 『明日はあたしの命日か……（諦め）』



## SNSに於ける可愛さ指数連関

お昼頃

加蓮『暇』

加蓮『トライアドしゅーごー』

加蓮『構つてにゃん』

奈緒『どうした。』

凜『構うわん。』

奈緒『突つ込まないからな。』

加蓮『学校やることないから暇なんですよね』

加蓮『面白い話してよ』

凜『だつてさ。』

凜『ほら、出番だよ奈緒。』

奈緒『えー。』

奈緒『そんなのない。』

加蓮『プリムスお笑い担当が聞いて呆れる』

凜『そんなんじゃないぞという時にスベリ倒す。』

加蓮『奈緒の肌みたいだね』

凜『加蓮に座布団3！枚。』

加蓮『ロツクだね！』

奈緒『熱中症で頭やられたか？』

加蓮『ねえ、ちゅーしよう……だと……つ!?』

凜『おあついねえ。夏だけに。』

奈緒『どつくぞ。』

加蓮『きゃー』

奈緒『つーか加蓮。』

加蓮『んー?』

奈緒『今日は補習の筈だろ。』

奈緒『呑気に携帯触ってて怒られないのか?』

凜『確かに。』

加蓮『休憩中なんだなこれが』

奈緒『そうか。』

奈緒『まあ、冗談で言った事だけど本当に気を付けろよ。』

加蓮『何を？』

奈緒『熱中症。』

凜『ねえ、ちゅーしよう……だと……っ!?』

加蓮『おあついねえ。夏だけに。』

奈緒『ゴピペしてんじやねえよ。』

加蓮『いいじゃん別にさ』

凜『流石は添い寝の奈緒。ツツコミのキレが違う。』

加蓮『突っ込み!?!』

加蓮『えつろ』

奈緒『止めろ!!!』

凜『なんで?』

奈緒『当たり前だろ!』

奈緒『昼間から猥談なんかよそう!』

奈緒『明るい話!』

奈緒『ね!』

凜『そう。』

加蓮『この程度で猥談はピュア』

加蓮『笑』

奈緒『は?』

奈緒『煽ってる?』

加蓮『いや別に』

加蓮『カワイイね笑』

奈緒『煽ってるんだろ。そういう耐性がないって。』

奈緒『そうなんだろ!』

加蓮『笑』

凜『笑』

奈緒『キレた』

奈緒『もういい』

奈緒『一番進んでる人が誰か』

奈緒『察せないなんて……w』

凜『どういう事?』

奈緒『いや』

奈緒『二人とも可哀想だな』

加蓮『意味わかんないけど』

加蓮『何の話？』

凜『explain.』

奈緒『よく考えろ？』

奈緒『あたしは既にプロデューサーさんと添い寝した』

奈緒『つまり、心を許された親密な仲』

奈緒『凜と加蓮は？笑』

加蓮『したよ』

凜『同上？』

奈緒『は?!?!』

奈緒『え?!?!』

奈緒『うそ!』

奈緒『え??』

奈緒『だ』

奈緒『ごじった』

奈緒『だめ』

奈緒『だめだろ!』

奈緒『おい!?!』

加蓮『どーどー』

奈緒『そういうのは!』

奈緒『と』

奈緒『特別っていうか!』

凜『荒れ狂う神、もとい神谷。静まりたまへ。』

奈緒『なんっ』

奈緒『どうして』

奈緒『せつめい!』

奈緒『説明義務を果たせ』

加蓮『国会議員で草』

凜『草って草。』

加蓮『笑↓囁↓草』

凜『へー。』

加蓮『多分ね』

奈緒『おい』

奈緒『きけ』

加蓮『あーはいはい』

!!

加蓮『答弁致します』

奈緒『よし!!』

加蓮『三日前かな』

加蓮『レッスンは終わってシャワーして』

加蓮『話があるからプロデューサールームに来て言われてたんだよ』

加蓮『でも行ったらプロデューサーさん寝てて』

加蓮『ソファで寝落ち』

加蓮『それで意地悪したっただけ』

凜『なるほど。』!?!?!

奈緒『彼女面か!?!?!』

加蓮『ブーメラ!?!』

奈緒『照れる』

加蓮『中々に奈緒も狂ってきましたね』

加蓮『お母さん嬉しい』

奈緒『凜は?』

加蓮『あれ?無視?』

凜『えつとね。』

加蓮『・°・°（っん、）°°』

凜『（、ん、）＼（へー！）』

加蓮『好き』

凜『顔文字頑張った。』

加蓮『偉い！』

奈緒『可愛い！』

凜『ありがとう。』

凜『あ、話だよね。』

凜『うーん。』

凜『私は結構前。』

凜『思い出した。半年前だ。』

凜『半年前に肩を貸してもらった。』

奈緒『肩？』

凜『そう。』

凜『ライブが終わった後だったから。緊張感とか、そういう張り詰めた空気が一気に

緩まってね。』

凜『まあ、ちよろつとの役だったけど……』



加蓮『何、その、えもいわれぬ感じは……』

奈緒『控室で二人きり、甘い雰囲気の肩枕です!?!もしかして!?!』

凜『ピンポイントに当ててきたね。正解。』

奈緒『は?大人の余裕に腹が立つ』

加蓮『わかる』

凜『ええ?』

凜『でも数分だよ?』

凜『加蓮もでしょ?』

加蓮『三分二十四秒』

凜『なんかそこまで細かく覚えてるの重い。』

加蓮『お茶目なだけだから』

凜『兎に角、』

凜『奈緒は一晩中じゃん。』

奈緒『まあ………』

凜『奈緒が一番だよ。』

加蓮『うんうん』

奈緒『そうか?』

奈緒『そうだな!』

奈緒『うん!あたしが一番だよな!』

凜『ちよつろ。』

奈緒『は??』

凜『いえ。』

奈緒『よし。』

加蓮『あ』

奈緒『どした?』

加蓮『そろそろ休憩終わる』

奈緒『了解』

加蓮『じゃーねー』

凜『また夕方。』

凜『私も課題あるから。』

奈緒『おう。』

凜『難しい問題とかは今度教えてね、先輩。』

奈緒『……………』

奈緒『はい。』

凜『ふふっ。』

凜『じゃ。』

奈緒『おう。』

事務所にて

奈緒「ふう……」

P「どしたため息吐いて。また凜加蓮？」

奈緒「ん。」

P「ニコニコしてたしやっぱりそうか。」

奈緒「……ニコニコしてたか？」

P「ん？ああ。」

奈緒「はっず。」

P「良い笑顔だと思います。」

奈緒「ほんとプロデューサーさんそれ好きだよな。」

P「笑顔厨なんだ。」

奈緒「なにそれ。」クスクス

P 「ははは。」

×

P 「奈緒の笑顔はいずれ万病に効く薬となる。」

## 突然の小雨に於ける可愛さ指数連関

夕方、某所にて

ザーザーザーザー

奈緒「なあ、もうちよつと離れてくれ……」

P「そうしたら俺が濡れるだろ。逆だ。もつと近づけ。ほら。」グイッ

奈緒「え……ひやつ!」

P「抱きつける距離だ。いいぞ?」

奈緒「はあ!?!う、ううう、うるさい!」

P「ははは。」

P「それにしても奈緒が傘持って立ってた時はびっくりしたぞ。知らないうちに俺がストーカーしてたのかと思った。」

奈緒「それはおかしいだろ……」

P「それで?」

奈緒「それで、つて?」

P「いや、気が利いてるじゃんか。仕事帰りの雨で困ってたら君がいるんだもん。」

びつくりだよ。」

奈緒「梅雨だしな。」

P「梅雨だから迎えに来てくれたの？どういう気分？」

奈緒「い、いいだろ別に理由なんて。帰るぞ。」

P「はいはい。」

P（分かりやすく顔を背けおってからに……）ニヤニヤ

五分後

奈緒「……………」

P「……………」

P & 奈緒（気まずっ！会話ゼロ！）

奈緒（なんだよこれなんだよこれ、相合傘で無言って、もうそれは、だって、うおお！）

P（というかそれ以上に雨音が煩すぎる。バチで太鼓でも打ち鳴らしてんのか？）

奈緒（さつき抱きつける距離がどうか言ってたし、なんかこういうのって、もしかや世間で持て囃されているこ、恋人……っ）

P (雨粒が跳躍してんねえ!ズボンびしょびしょやぞ!車も通りがかりに泥水ふつとばしてくるしなあ!?)

奈緒 (顔が熱い……………!)

P (足が冷たい……………!)

奈緒 「……………なんで黙ってるんだよ?」

P 「はは。なんでだろうね。」

P (雨水がうざいからだだよッ!テメエこのやる!)

奈緒 (ちよつとやめろよ、その察してよムーヴ……………モテる女のテクニクじゃん……………興味を惹かせてから好意で攻めてくるじゃん……………そういうことじゃん……………)

P (おい、下向くな奈緒、おい。危ない。事故る。)

P 「傘貸せ。」ヒョイツ

P (雨に濡れたくないでござる。)

奈緒 「わっ。」

奈緒 (手触れた。)

P 「近寄れ。マジで。」

P (君が濡れて帰ったらどやされるのは俺。おわかり?)

奈緒 「……………」

奈緒（肩触れた。）

P 「行くぞ。大丈夫か？」

奈緒（ダメだ。我慢できない。）

奈緒 「んえ？……あう……／／／」

P（!？）

P 「なあ、奈緒。大丈夫か？」

奈緒 「ん……あたしもすき……／／／」

P 「?????  
（思考停止）」

×

夜、事務所にて

P 「ヘルプミー、凜加蓮。」

凜 「なに。」

加蓮 「あちい。」パタパタ



P 「奈緒がまた壊れた。」

凜 「何したの？」

加蓮 「じとじとする。」パタパタ

P 「いつも通りなんすけど……加蓮？」

加蓮 「んー？」パタパタ

P 「手持ち扇風機をスカートの中に突っ込まないで？はしたないわよ？」

加蓮 「ふふ。見たい？」ニヤニヤ

P 「見たい。」

加蓮 「……そう。やだよ。変態。」

P 「なんでや！」

凜 「いやいや、プロデューサー。それでしょ。原因。」

P 「え？どれ？」

凜 「梅雨の湿気で奈緒に何かやらかしたのは明白だし、まあどうせそういうセクハラをやらかして壊れたんでしょ？ってこと。」

P (セクハラ？)

P (………足が濡れた事と傘を奪った事か？)

P (なんとかしたいけれども……)

P 「だとしたらどうすればいいんだろう、俺。」チラッ

奈緒 「えへへ／＼／」

加蓮 「どんなセクハラしたの？さっきアタシにした感じ？」

凧 「あれはレベル10だね。奈緒はレベル0.5でも照れるから判断が難しい。」

加蓮 「ほらほら、教えなさい？」

P (えつと……)

P 「奈緒の手を引いて、肩に俺の手を回した。」

P (じゃないと危なかったし……)

加蓮 「ん？」

凧 「ん？」

加蓮 (それはまさしく)

凧 (恋人の造作では?)

P 「大丈夫かどうかを訊いて、そしたらうんって言われた。」

P (心配だったし。突然黙るんだもん。)

加蓮 「は……え？」

加蓮 (なに、そのえちちの前の雰囲気的な、)

凧 「何を大丈夫か聞いたの……？」

加蓮（ナイス、凜……ッ！）

P「濡れてないか。」

P（雨に。）

凜「?!?!」

加蓮「……コイツらもしかしてラブホ行つてた……?」

凜「え……えっ??」

加蓮（ま、まさかそんな。）

P「あ、そうそう。俺の足までびしょびしょになつてさ。水をかけられてな。」

P（車、許すまじ。）

加蓮（?!?!）

凜「は?!?!」

P「うお、どした。大声出して。」

加蓮「出したのはお前だろ変態がよ……」

P「え、なんだ唐突に。」

奈緒「んふふ……♪」

凜「そつか……大人の階段を、昇つたんだね……奈緒……」

P「どこ見つめてるんですか凜さん？」

加蓮「アタシのパンツ見る前に奈緒のパンツ見てたんだね納得そういう訳ね死ぬゴミ  
クズ女の敵裏切り者テクニシャン。」

P「突っ込まないよ。」

加蓮「奈緒には下半身のそれを突っ込んでおいて何を今更。」

P「は? (軽蔑)」

凜「プロデューサー?」

P「え、はい (困惑による恐怖)」

凜「私としてもしてよ。」

P「嫌です (本能的逃避)」

凜「奈緒とはしたのに? セッ」

P「アアアアアアアアアアアア!!! キコエナイ!!!」

P「ていうかしてねーよ! 何でそうなったんだよ! え!? どういう!? え!? わからん!!」

加蓮「なーお。プロデューサーとした感想は?」

奈緒「あつたかなくて、きもちよかった (手の感触)」

加蓮「クタバレヤリチ●。」

P「加蓮ツ! いけないツ! ラインを守れツ! アイドルなのよツ!」

加蓮「アタシも性奴隷にする気なんです! 最低地獄に堕ちろ。」

P 「せーへんわ!!!!!!」

!!!!!!急にどうしたんだお前!!!!!!」

凧 「奈緒にしたみたいに、壊れるまで愛して?」

P 「黙れ。」

加蓮 「声を我慢させてやるのがいいんだ。」

P 「沈黙しろ阿呆。」

凧 「……」

加蓮 「……」

P 「よしよし、それでいいんだよ。」

凧 「3Pする?」

加蓮 「4Pでしょ。」

奈緒 「さんせー!」

P 「なるほどね、君たち説教。」

ヴェアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!

×

P 「断じて俺は手エ出さないから。」

## 仕事関係に於ける可愛さ指数連関 01

昼、事務所にて。

奈緒「なあ、プロデューサーさん。」

P「んー？」

奈緒「この漢字なんて読むんだ？」ズイツ

P「あー……諂へつちう。」

奈緒「意味は？」

P「ご機嫌取り。」

加蓮「プロデューサーさんじゃん、それ。」

P「黙れ。」

加蓮「ひでえ。」ケラケラ

奈緒「じゃあ、これは？」

P「傾慕けいぼだな。」

奈緒「意味は？」

P「めっちゃ愛してる、的な。」

凜 「え、プロデューサー今告白した？」

P 「黙れ。」

凜 「……」 ションボリ

P 「とかどうかどうした、奈緒。学校で漢字テストでもあんのか？」

P 「つて、ドラマの台本じゃないかそれ。なるほどな。」

奈緒 「そ。覚えるのに早すぎるなんて無いしき。もう練習しておこうかなって。」

P 「いい心掛けだな！そういうところが好き！」

奈緒 「キモいから止めてくれ。」

P 「」

加蓮 「おお、プロデューサーさんが灰に……大丈夫ー？」

P 「慰めて……」

加蓮 「よしよし。」 ナデナデ

P 「バブーツ！」 オギヤーツ！

凜 「え、プロデューサー今告白した？」

P 「幻聴です。」

凜 「でも今着けてるヘッドフォンから声が。」

P 「他人の声じゃないでしょうか。」



加蓮「いや、プロデューサーさんの囁きボイスでも聴いてたんでしょ。多分。」

P「なるほ……………え？」

凜「はあ……………加蓮？」

加蓮「はいはい。ごめんて。」

凜「ヘッドフォンはしまつて、と……………さて、奈緒。台本の練習するんだよね？」

奈緒「ん？あぁ。」

凜「私達も手伝うよ。その方が良いでしょ？」

奈緒「ホントか!?!ありがとう!!」

P（あのー、囁きボイスって一体、）

加蓮（プロデューサーさん。）

P（はい。）

加蓮（忘れて？）

P（無理ですね。）

加蓮（忘れてね？）

P（だから無理です。）

加蓮（秘蔵のコレクション、左から一、下から三、鍵は青色、暗証番号は0810……………）

P（おい待て何で知ってたんだ。）

加蓮（ふふ。忘れて、ね？）

P（……………背に腹はかえられねえ。了解した。）

加蓮（感謝！）

×

奈緒『漸く来た。ずっと君を待ってたんだよ？……………ずっと。』

P『わり。妹の愚痴聞いててさ。』

凜『待つてるって知らなくて……………その、ごめんなさい。』

奈緒『……………うん。いいの。待つのに慣れてるし。』

P『……………ああ、そう。』

奈緒『それじゃあ、一緒に帰』

加蓮『あらら？先輩、何してるんです？』

奈緒『……………』

加蓮『奈緒先輩もいるし。』

P 『別に何も。帰ろうって話してただけ。』

加蓮 『折角こうやってメンツ揃ってるのに!? ダメですよ先輩! こういう時はご飯食べにく、とか行くんです!』

凜 『確かにお腹へったかも。』

加蓮 『でしよ?』

P 『あー、まあ、そうだな。それもありか。』

加蓮 『さつすが先輩! ノリが良いです!』 ギュッ

奈緒 『つ……』 ギリッ

P 『抱き着くなアホ後輩。』

加蓮 『へへ。』

奈緒 『媚び諂うしか能の無い塵芥が私の彼に……』 ボソボソ

加蓮 『んえ? 何か言いましたか、奈緒先輩?』

奈緒 『何も言っていないよ。気にしないで。』

P 『それでどーする? 奈緒は飯食べに寄り道しても大丈夫か?』

奈緒 『そうだね……大丈夫だよ。』

凜 『……』

凜『奈緒さんって、兄さんの事が好きとか、そういう事ありますか？』

奈緒『うーん……あるけど、でも、恋愛感情とはまた違うものかな。』

凜『親愛ですか？』

奈緒『……傾慕、だよ。』

凜『あの……加蓮さんって兄さんの事、』

加蓮『しー。』ピトツ

凜『え……』

加蓮『後ろ。』

凜『……』クルリ

奈緒『……』ジロツ

凜『ひっ……』

奈緒『彼には、先に外へ行ってもらったから。』

加蓮『そっかー。』

奈緒『あのさ、彼に近付かないでくれない？』

加蓮『私こう見えて幼馴染なんすよね〜だからムリっぽいです！ごめんなさい！』

奈緒『……あんまり迷惑かけると、知らないからね？』

加蓮『……調子にのるなよ妄想女。』ボソリ

凜『あの、その、』

奈緒『安心して。お兄さんは、私を守る。このゴミから。』

P「カーツトオオオオオオ!!!ちよつと待てエ!なんだこの台本ツ!!」

奈緒「読ませといて言うのもアレなんだが三人ともよく断念しなかったな……あたしはやっぱり慣れない……」

凜「私のは常人だし。それより奈緒の肌が真っ赤すぎて心配。オレンジサファイアパッション。」

奈緒「だってこれヤンデレじゃん!!恥ずかしくない方がおかしいだろ!!」

加蓮「アタシの役ってこの後プロデューサーさんを襲うみたいだよ。狂気だね。ウケる。」

奈緒「コイツは例外!」

加蓮「コイツ呼ばわりは悲しいなあ……演技中も変にアタシだけゴミ扱い受けたし……およよ。」

P「その前にこれ、こんなに昼ドラな仕事だったっけ……?」

奈緒「脚本の人が番組プロデューサーと酒を酌み交わしながら推敲したらしい。」

P「ええ……」

奈緒「その結果ヤンデレ物と罪を憎んで人は憎まずにセクシーともかくにもほら世  
界はセクシー物の二つが出来たらしい。」

P「?????」

奈緒「後者は凜が適任らしい。」

凜「!?!?!」

加蓮「!?!?ヤンデレか……案外、奏とか似合いそうだよね。」

P「君もよく似合ってます。」

加蓮「浮気者は殺しちゃうぞ♥?」

奈緒「キモ。」

加蓮「は?」

P「落ち着け。愛してるぞ、加蓮。」

加蓮「アタシも好き。両想いだね。ちゅーしよ。」

凜「分かった。」ガシッ

加蓮「待て貴様ではないッ!!!」

奈緒「そういえばキスシーンってあるのか?」

P 「NG出してあるから無い。」

加蓮 「でもアタシのやつ性的に襲ってる。この後。」

P 「その役をやるのは君ではないからね。」

凛 「でもプロデューサーの貞操観念はガバガバでは？」

P 「この男役も別の人なんだよな。お分かり？」

加蓮 「おかわり!?!性的なアレを!?!」

P 「……調子にのるなよ妄想女」ボソリ

加蓮 「セリフを奪うのと処女奪うのって似てる。」

P 「似てねえよカス。」

加蓮 「諂いが足りない。」

P 「伏線回収すんな。」

×

P 「今回漢字と演技の勉強しただけじゃね？」

奈緒 「アイドルは普通そういうものだよ。」  
P 「そういえばそうだわ。」



## クリスマスに於ける可愛さ指数連関

事務所にて

P 「テロ起きねえかな〜。」

奈緒 「いやいや突然どうした。」

P 「もうクリスマスだろ?」

奈緒 「うん。」

P 「つまり酒池肉林じゃん。」

奈緒 「うん?」

P 「アルコールに聖なる火を放って罪人共を浄化したい頃って訳。」

奈緒 「ちよつと何言ってるか分からないです。」

P 「何が性夜だマグダラのマリア様はお泣きになられるわ!」

奈緒 「なるほど妬んでんだろ、ぼっちだから。」

P 「は?!?!?、ちちちちちちちちちちげーし?!?!?カリスマギヤルと約束あるし?!?!?」

十七歳のカリスマギヤル「?!?!?」

凜 「見栄張るのよしなよ、プロデューサー、美嘉。」

十七歳のカリスマギヤル（え、どうしてアタシも？）

P 「うるせー!! 菜々さんとも夜を過ごすんだぞ俺はー!! やけ酒やけ酒ー!! フウー  
!!!」

十七歳!! 「十七歳!!」

奈緒 「表示バグってますよ。」

加蓮 「とりあえず全員落ち着け。」

P 「うう……加蓮……ポケットから秘密道具出してよお……僕をクリボッチから救ってくれえ……」ウルウル

加蓮（………ヒモ養うのもアリかも。）ゾクゾクツ

凜 「お前が一番落ち着け。」

奈緒 「あのさあ……トラプリはクリスマスに仕事あるって、プロデューサーさんも理解してる？」

P 「まあ、うん。入れたの俺だし。」

奈緒 「それなら、今言うべきは嫉妬や怨嗟の念じゃないって解るよな？」

P 「確かにせやな。」

奈緒 「あたし達に劳いの言葉をかけるとかさ、ほら、色々あるじゃ」

P 「ミニスカサントコスしてくれや。」

奈緒「ん……………」

凜「……………」

加蓮「……………」

十七歳のカリスマギャル「……………」

十七歳!!「……………」

P「冬なのに。」ニチャア

アイドル達（ええ……………」

×

P「フォーエバーセブンティーンとギャルセブンティーンは仕事に行きました。見たかったなあ。」

凜「キモ……………」

P 「照れるぜ。」

凜 「は？」

P 「初対面の時と同じ反応になっちゃった。」

凜 「寒いから淡白なの。」

加蓮 「それ。」

奈緒 「プロデューサーさんのせい。」

P 「サンタだけに惨憺ってか？ギヤハハ！」

凜 「永久凍土（軽蔑）」

加蓮 「0点。寒すぎ。死んで。」

P 「僕は色々熱くなりました。」ハアハア

奈緒 「興奮すんな変態。」

凜 「ホントになんでアンタの為に生足魅惑のマーメイドにならないといけないの？」

P 「それは夏の歌では？」

凜 「知るか●すぞ（憤怒）」

P 「アイドルさん!?!（動揺）」

奈緒 「アイドルだから何やねん熱いとか夏とか煽ってんのかこちとら腹まで出しとるんやぞッ！」

P 「ごめん。」

奈緒 「そう正直に来られるときあ……」

P 「でもそういうエツチな格好が好きなの。許して。」グツ

奈緒 「知るか●すぞ（失望）」

P 「アイドルさん!?(動揺)」

加蓮 「プロデューサーさんも臍出し肩出しやってみてよ。そして抱いて。」

P 「需要がないです。」

加蓮 「知るか●すぞ（欲情）」

P 「アイドルさん!?(動揺)」

加蓮 「抱きついてやろ。」ギユツ

P 「へアツ!？」

奈緒 「プロデューサーさん顔真っ赤じゃん。」ニヤニヤ

P 「イヤトツゼンカレンニダキシメラレルトカダレガヨソクデキチヨットムネガスゴ  
イツ!!!」

加蓮 「あつたか。」ムニユムニユ

奈緒 「あたしも入れて。」ダキツ

凜 「……着替えてくるね。」

P 「え？凧ちゃん？ほらほら？」

凧 「は？」

P 「ごめん。」

凧 「好きでもしたくない事はあるよ。コスプレとか。」

P 「マジレスあざす。」

奈緒 「それだとあたしはしたがつてる人になるんですが、アデノシン三リン酸？」

加蓮 「事実じゃん。」

奈緒 「違います。」

加蓮 「えっちしたくないの？」

奈緒 「うーん、認識の齟齬。一度死のうか。」

加蓮 「逝くとイくってか??w」

奈緒 「寒さでおもちやがおかしくなっちゃった……」

加蓮 「は？おもちや？アタシ？」

奈緒 「そうだが？」

加蓮 「おもちやでいくのはちよつと。」

奈緒 「（？）」

P 「凧が着替えていなくなって寂しい。二人はいいよね。見つめ合って楽しそう。」

?????

奈緒「楽しくない！というかい加減加蓮はプロデューサーさんから離れろ！」  
ギューツ

加蓮「寒いからヤ。」ギューツ

P「苦しいンゴ」バキツゴギギ

奈緒「凜みたいに着替えればいいじゃん！」ギューツツ！

加蓮「寒いからヤ。」ギューツツ！

奈緒「Bot化すんなあ！」ギューツツ！！！！

P「天井にイエス様見えてき、あつあつあつ」ボキツバキツゴリツツ

加蓮「そんなに言うなら奈緒が離れれば？」スリスリ

奈緒「いや、これはクリスマスプレゼントだから（意味不明）」ピチャピチャ

加蓮「さもありなん。」キユツ

P「アツ」

奈緒「ん？」

加蓮「ん？」

凜「たった数分の間に何が。」

P「チーン

奈緒「加蓮がミニスカコスで抱きついておもちやが云々。」

加蓮「語弊。」

美嘉「そもそも発端を知らないから何故二人が正座しているのか教えて欲しい。」

菜々「お仕事が終わって帰ってきたらこれですもんね。」

美嘉「加蓮はそんな格好して寒くないの？」

加蓮「そこでのびてる男に暖めてもらってましたから。」

美嘉「は?!?!ちよ、え?!?!」

凜「落ち着いて性知識小学六年生。」

美嘉「バカにしてんのか。」

加蓮「せいかーい。」

美嘉「後で屋上。」

加蓮「ヤ。」

菜々「待つて待つて、話題が流れそう。戻しましょう。」

奈緒「そうですね高校二年生。」

菜々「……………」

奈緒「何でしょう高校二年生。」



菜々「私もしかして苛められてます?」

加蓮「事実を申し上げなさっているだけなのに。」

凜「それは被害妄想にあらせられます。」

菜々「美嘉ちゃん……ナナ、今から人生で初めて人を殴殺します。」パキツパキツ

triaad「wait! wait, please!」

nana「Don't worry. I just murder you.」

triaad「Are you kidding!? It's misunderrsta

nding!」

美嘉（何言ってるのか全然分からん。）

美嘉「……というか結局プロデューサーは何でのびてるわけ……?」

×

P「頸椎と肋骨をやられました。」

なおかれ「ごめん。」

P 「まじ許す。」

なおかれ 「ちよろ。」

P 「許すまじ。」

なおかれ 「!？」

## 動物性に於ける可愛さ指数連関

某日の事務所にて

奈緒「にゃーん。かまってにゃん。」ネコミミ!

P「え、何急に。発情期?」

奈緒「首落とすぞお前。」

P「でも今のそれは発情期の猫の鳴き方だぞ。」

奈緒「知らねえよ。逆にどうして知ってるんだよ。」

P「実家で猫飼ってるからな。」

加蓮「もしかしてプロデューサーさんって女の事を猫って呼んでるの……?やば……」

P「早とちりで勝手にひくな。」

加蓮「先入観だから許してよ。オス。」

P「許しの請い方知らんのかテメエ……」

凜「それで?奈緒は何で猫耳つけて発情期の声出してたの?」

奈緒「出してない!!」

加蓮 「猫耳はアタシが装着させました！なおかわでしよ。」

P 「なおかわだな。」

凜 「なおかわく」

奈緒 「全員脳ミソ入ってないのか？」

加蓮 「あれれ？怒髪天なの？」チラッ

奈緒 「含みを持たせた発言は全て悪と断定してあたしは喜び勇んで殺戮の限りを尽くすけど。」

加蓮 「謹んで御詫び申し上げます。」

奈緒 「うむ。」

凜 「でもかわいいのは本当だよ。」

奈緒 「いやいや猫耳とか柄じゃないって……」

加蓮 「そう？」

凜 「似合うと思うけど。」

奈緒 「変だろこんなの……」

凜 「プロデューサーの方がよっぽど変だし変態だからそこは安心していいよ。」

奈緒 「確かに。」

P 「俺をダシにして会話を進めるな。」

奈緒 「猫は狡猾なんだよ。」

P 「それにしてもこの前漢字読めなかったじゃん。」

奈緒 「いやそれは」

P 「バカ笑」

奈緒 「ふふふ、あたしは大人なので挑発にはのりません！」

P 「奈緒の好きなアニメのヒロインってすぐ主人公に惚れるよね。催眠でもしてんのあれ？」

奈緒 「侮辱か？拷問してから殺す。」

P 「ごめんて。止まってくれ。」

奈緒 「人は急には止まらない。」

加蓮 「車じゃん。モ●カー？」

奈緒 「そういう意味じゃねえよ！」

P 「違うぞ加蓮。奈緒には勝ち取りたいものがあるんだ。」

奈緒 「オ●ガじゃねえよ！」

加蓮 「というか奈緒ってプロデューサーさんの家に泊まった事あるよね？嘘ついたの？」

奈緒 「とまる違い！」

奈緒「ツツコミが追いつかない……」

凛「どちらかという私と奈緒は犬っぽいけどね。話を戻すけど。」

加蓮「プロデューサーさん！お手！」

P「いや、さすがに大人がそんなことを」

加蓮「やれ。」

P「はい……」

P「わんわん！」

加蓮「プロデューサーさん！お手！」

P「わん！」パシッ

加蓮「三回回って！」

P「わん！」クルクルクル

加蓮「じゃあ2引く1はー？」

P「いち。」

加蓮「おい。」

奈緒「犬か……まあ、発情期の猫とか言われるくらいならそっちの方がいいかな。」

P「国家の犬？」

凛「それは社畜のプロデューサーの方では。」

P 「ほんまや！わんわん！」

加蓮 「いちを英語でー？」

P 「ポジション。」

加蓮 「おい。」

凜 「私も……犬耳つけようか？」

P 「え？お、おう。唐突だな。」

凜 「つけてくる。」タタツ

奈緒 「なんであんなに意欲的なんだ……」

加蓮 「構ってほしいんですよ。なんやかんや。」

P 「奈緒も犬耳に変えたら？」

奈緒 「やだ。猫耳外してくる。」

P 「え！ホントに犬耳に!？」

奈緒 「つけないってば!……つけないからな!」タタツ

P 「無念。」

加蓮 「残念。」

P 「……………」

加蓮 「……………」

加蓮 「アタシは何の動物が似合う？」

P 「そのままが一番可愛いわ。」

加蓮 「真面目やめてよ。」

P 「フェニックスとか。」

加蓮 「不真面目すぎる。」

P 「流れる的に猫じゃない？」

加蓮 「にゃー。」

P 「やる気ゼロ。」

加蓮 「ゼロじゃないにや。」

P 「不思議とクるものが無い。」

加蓮 「は？……待ってて、女を見せてやる。」 タタツ

P 「……皆行っちゃった。」

P 「一人しりとりでもして待つか。」

P 「クーゲルシュライバー……バレンタインしね……ねちっこい攻めをやめない変わり者の田淵……ち●この魔術師、杖術の佐原……ラリってもラリってもやはりバカ（種



無し山頭火)のIQ300のスマス……数回女にフラれた腹いせに宗教法人立ち上げた  
逆境の林……シコった報告をわざわざ電話で毎日、一時間かけて伝えてくる絶倫の西園  
寺……」

P「そうだよ、一時間経ってんだけど。なにこれイジメ？飽きたよ一人しりとり。」

凜「お待たせ。」

P「やつとか。」

凜「わん。」イヌミミ

P「よーしよしよしー！」

凜「わんわんっ。」ニコニコ

P「お手！」

凜「は？」

P「えっ。」

凜「それはペットにやるものじゃん。」

P「でもあなた犬では……」

凜「動物の耳つけたらプロデューサーのペットになるの？それじゃあみくはペットなの？違うでしょ？」ワンワン

P「お前、言動と行動が噛み合ってねえぞ……」

凜 「犬は飼い主に我儘なの。わんわん。優しく構って。」

P 「やっぱりペットじゃない。」

凜 「キレそう。」

P 「怒っても怖くないが。」

凜 「じゃあお望み通りペットらしくしようか？脱ぐよ？そして四つん這いになってあげる。その後は飼い主であるプロデューサーの身体を舐め回すね？一緒に寝てもいいよ？」

P 「容赦って言葉をキミの辞書に加えてほしい。」

凜 「でもこういうの嫌いじゃないでしょ。」

P 「まあな！」

凜 「もしもし、警察ですか？」

P 「まあまあ！落ち着いて！ごめんて！」

加蓮 「今ママって言った!? ママだよー！」

P 「言っていないしお前はママではないしその耳はなんだ。」

加蓮 「兎耳！いいでしょ。」

P 「どうか後ろに隠れてる奈緒さーん。」

加蓮（無視!?!……別に、いいけど?)

奈緒「なんだよ……」

P「何で加蓮を盾にしてんのー?」

加蓮「折角だし衣装着たんだよね。」

奈緒「加蓮が着せたんだろ……うう……」

凜「奈緒。恥ずかしがってないで出てきて。」

奈緒「……………はい……………」スツ

P「な、なに!?露出が多い!?垂れた犬耳に黒の首輪とお腹や脚を出したモコモコ衣装!?これは……………これは……………!!」

加蓮「煽られるねえ。そそられるねえ。」

P「それな。」

凜「寒くない?」

奈緒「恥ずかしくて逆にあつい……………」

凜「なにその回答かわいい。」

P「あのさ……………奈緒はどうしてそんなに男の漢をイライラさせるのが上手いの?もうボクは我慢が出来そうにない。目の前に極上のフルコースを並べられている気分だ。」

加蓮「とんでもないセクハラだ。キモすぎ。」ジユルジユル

凜「涎垂らしながら言っても説得力無いよ……………」

奈緒「え……えーと……アイドルなら魅了するの上手くて当然じゃ……?」

加蓮「確かに。」

凜「唐突のマジレス。」

P「何も言えねえ満点の回答。これにはプロデューサーもニツコリ。」

奈緒「もういいだろ!?き、着替えてくる!」

P「え!かわいいのに!もう!」

奈緒「かつ、かわいいか?」

P「うん!」

奈緒「………も、もっかい言つて?聞こえなかった。」

P「奈緒はかわいい!すき!」

奈緒「へ、へへ………そうか。」

凜「はいはい。いつものね。着替えるよほら。」

奈緒「へへへ………」ズルズルズル

P「え、また二人?」

加蓮「ヤなの?」

P 「別に。」

加蓮 「じゃあいいね。」

P 「そうだけど……外していいんだぞ、それ。鬱陶しいだろ。」

加蓮 「そう?……分かった。」

P 「にしても何故に兎耳? フォーエバーセブンティーンへの憧憬?」

加蓮 「兎は性欲凄いらしいよ。」

P 「はあ。」

加蓮 「……………」

P 「……………」

P 「え、お前……………」

加蓮<sup>??</sup>「そうだ、奈緒だけずるいし今度お家行くね。」

P 「……………」

加蓮<sup>??</sup>「二人の所行く。じゃ。」

P 「は? 待て、匂わせるだけ匂わせて帰るな。香水のせいにするな。」

P 「……………おいおい。」

P 「なおかわはいずこへ。」

## 北条加蓮の気まぐれ 01

休日の朝 Pの家

P「宣言通りマジに来たのね。」

加蓮「勿論！」

P「待って、荷物えぐない？俺の家で何するつもりなん？占拠すんの？」

加蓮「大丈夫。二泊三日するだけ！」

P「え、狂ったのかお前は？」

加蓮「違うから。プロデューサーさんがだーいすきなだけだし。」

P「キヤラ。」

加蓮「んー？誰にも邪魔されない時はいつもこんなじゃん。でしょ？」

加蓮「奈緒との思い出をアタシので上書きして、もっともっと好きになってもらうね。よろ。」

P「????????????????????」

加蓮「だからまず奈緒と何したか詳しく教えて。嘘ついたら分かるから。」

P「分かるんですか？（畏怖）」

加蓮「うん。」

P「俺は男である。」

加蓮「本当。」

P「高校では成績上位10%だった。」

加蓮「20%じゃなかった？」

P「そ、そうです……」

P「好きな女のタイプは背が高く貧乳な人。」

加蓮「本当。でもこれからアタシがねじ曲げてあげる。安心して。」

P「こわすぎる。安心するのにねじ曲げるとかいう言葉いらないでしょ。」

加蓮「でもアタシ結構良い身体してるよ？成長の余地もあるし。どう？」

P「ねえ、今日の攻め方本気すぎない？ガチで落とすにきてるよね？俺、今グラグラ

きてるもん。」

加蓮「うん。すぎだよ。」

P「うーん、会話のベクトル。」

加蓮「それで奈緒と何したの？ねえ。」

P「あー……最初はスマブラしたな。」

加蓮「に、苦手なやつだ。」



P 「そうなん？」

加蓮 「前に一回、奈緒にボコボコにされてからトラウマで……素手の喧嘩なら負けないのに……」

P 「普通はそっちの方が苦手なんだよな。」

加蓮 「他のゲームやりたい。」

P 「いいよ。うーん……そうだな……」

加蓮 「愛してるゲームしようよ。」

P 「唐突。」

加蓮 「愛してるっ。」

P 「何、もう始まってるのはこれ。」

加蓮 「愛してる愛してる愛してる！」

P 「はいはい、俺も愛してる！」

加蓮 「録音した。」

P 「おい。」

加蓮 「脅し道具ゲット。」

P 「十六歳のやる事じゃねえ。」

加蓮 「年上の方がすき？」

P 「うーん、情報の齟齬。」

加蓮 「でもプロデューサーさんって確かロリコンだよな。」

P 「どこ情報だよ。ちげえよ。」

加蓮 「あれ？ そうなの？ ちひろさんの情報も間違う事あるんだ……」

P 「今日だけでもう頭がパンクしそうなくらいのヤバい話聞いている。」

P 「千川の姉貴が何してらって？」

加蓮 「ちよつと！ アタシと一緒にいるのに他の女の話!？」

P 「理不尽という言葉はこの時の為に存在していたんだなあ（白目）」

P 「あの。」

加蓮 「うん。」 ギューツ

P 「距離。」

加蓮 「うん。」 ギューツ

P 「いや、うんじゃなくて。」

加蓮 「………すきって言った方が良い？」

P 「CPUの故障が著しいねえ。粗大ゴミかな？」

加蓮 「泣きそう。」

P 「勝手に泣いてくれ。」

加蓮 「プロデューサーさんはSなんだね。理解。」

P 「文脈。」

加蓮 「脈アリだよ。だいすき。」

P 「脈違い。」

加蓮 「病弱ネタを擦るのはちよつと。」

P 「その脈でもない。」

加蓮 「山登りと称して胸触るつもり!？」

P 「今までの話の流れでどうして山脈なんて出てくるんだよ……出すわけないだろ……」

加蓮 「プロデューサーさんいつも見てくるから興味津々なのかなって。」

P 「それはそうですね。あ!つまり俺が悪いのか!」

加蓮 「そうだ!プロデューサーさんは悪!」

P 「あはは!調子に乗るなよ。」

加蓮 「キャラ変こわ。」

P 「テメエ、アイドルのくせに男の家に入り込んでんじやねえ……流されそうに

なつたが俺も大人じゃけえ……はよう帰れや……（正論）

加蓮 「台風で外歩けないの？」

P 「え？」

加蓮 「カーテン開けてみてよ。」

P 「……………」 サツ

P 「ほんまや！いつの間に台風来たんだ!？」

加蓮 「今日の明朝頃だったかな。」

P 「あれ……それなら加蓮はどうやってここに……？」

加蓮 「夜中に来たの。プロデューサーさんが寝静まって数分後くらい？」

P 「……そういえば鍵は？」

加蓮 「持つてる。」

P 「指紋認証もあるでしょ？」

加蓮 「登録してあるの忘れちゃった？」

P 「加蓮。」

加蓮 「何？」

P 「警察行こう。俺も付いて行ってあげるから。罪を償え。」

加蓮 「どうせ一緒なら式場にしよう？」

P 「誰かーっ！助けてくれーっ！脳が理解を拒んでるよーっ!!」

加蓮 「まあ、こんな天気じゃ帰れないし、当然警察もムリ。なし崩しのただにお泊まりは決定だね。」

P 「お前はなし崩しの意味をきちんと調べた方がいい。」

加蓮 「松葉崩し？」

P 「頭の病院行こうな。」

加蓮 「理解を拒むような脳をお持ちのプロデューサーさんこそ頭の病院行けば？」

P 「急に煽るのやめてよ。」

加蓮 「だつてすきつて認めてくれないから。」

P 「この機械叩いたら治るかな……」

加蓮 「ごめん、アタシSなんだ。」

P 「いや、知らんが。」

加蓮 「今知れたね！」

P 「うーん、会話能力。」

加蓮 「因みにプロデューサーさんはMなの？」

P 「Pです。」

加蓮 「上手な避け方するね。」

P 「照れる。」

加蓮 「かわいい。しよ。」

P 「……何をですか？」

加蓮 「セツ」

P 「黙れ。」

加蓮 「訊いたのそつちなのに。」

P 「俺が好きならこの理不尽を受け入れろ。」

加蓮 「へー。DVも上手いんだね。履修済み？」

P 「DVは教養科目じゃないが。」

加蓮 「じゃあDVのギフトドじゃん。すご。」

P 「志希が怒りそうだな。」

加蓮 「DMそうだし良いでしょ別に。」

P 「だからその突然冷徹になるの怖いからやめて？」

加蓮 「はーい。」

少し後

加蓮「愛するプロデューサーさんの為に丹精込めたお昼ご飯作るね！」

P「もった作った。」

加蓮「」

P「簡単なやつだけどごめんな。はい、パエリア。」

加蓮「」

P「自家製野菜ジュースどうぞ。」

加蓮「」パクツモグモグ

加蓮「」ゴクゴク

加蓮「ん。」

P「自信あります。どう？美味しい？」

加蓮「今から死ぬっ！」

P「軽快に発言する内容ではない。」

少し後

加蓮「膝枕して。ヘタクソなやつね！」

P「逆に技巧を凝らした膝枕って何だよ……」

P 「ほら、頭乗っけろ。」ポンポン

加蓮 「よし、いきます……よいしょつと……」ゴソゴソ

加蓮 「……っ！」

加蓮 「ふむふむ……なるほどこれは……！」

加蓮 「スヤア」

夕方

加蓮 「魔性の男こわい!!!」

P 「うるさ。」

P 「何の話だよ。」

加蓮 「いやいや、え!?アタシ一応アイドルだよ!?!」

P 「うん。」

加蓮 「プロデューサーさんマジで何者!?ハリウッドスター!?!」

P 「飯が美味くて膝枕も上手い奴全員ハリウッドスター説を提唱するな。」

加蓮 「癒すつもりが癒されてる……変だよこれは。」

P 「何でもいから帰ってくれねえかな。台風どっか行つたし。」



加蓮 「やだ。既成事実欲しい。」

P 「お前はアイドルなんだよ。分かる？」

加蓮 「その前に女だが？」

P 「逆ギレしないで。」

加蓮 「男みせてよ。襲うとかさ。」

P 「男性像が極端すぎない？」

加蓮 「アタシが女見せないとダメかな……」

P 「何をするんです？」

加蓮 「襲う。」

P 「うーん、堂々巡り。」

加蓮 「手っ取り早くてやり易くて確実！」

P 「暗殺かよ。」

加蓮 「しよつか？」

P 「殺し文句のダブルミーニングやめろや。」

加蓮 「もうアタシは腕つぶしでしかプロデューサーさんに勝てないから仕方なくない

？」

P 「強行手段!？」

加蓮 「そうですね。」

P 「そこは否定してくれよ……」

加蓮 「お風呂一緒に入るー。」グイー

P 「えっ、は!? お前マジか!？」

P 「いや、力つっよ!!!」

P 「あああああああああああ!!!」

## 浴室

P 「風呂キモチイー!」

加蓮 「即落ちニコマ。」

P 「それにしても水着を着てくれてて良かったわ。まだ良識的なんだな。」

加蓮 「奈緒の思い出の上書きだからね。最大限の力は出さなくてもいいかなって。」

P 「正直に恥ずかしいって言えばいいのに。」

加蓮 「違うし。」

P 「積極性と恥じらいのマリアージュや、善し。」

加蓮 「きもっ。」

P 「S 同士だから反発するぞ。」

加蓮 「脅し方キテレツすぎない？」

P 「お互い様。」

加蓮 「好きの気持ちはすれ違うのに。」

P 「……………」

加蓮 「……否定しないと両思いで終わるけど。」

P 「うるさ。」

加蓮 「ふふ。女の子の特権です。」

P 「はいはい。もう出るから。」

加蓮 「えー。早くなーい？もつと二人きりでいようよー。」

P 「一人で勝手にほざいてな。」

加蓮 「ちえ。ツンデレが。」

## 北条加蓮の気まぐれ 02

夜ご飯の後 Pの家

加蓮「奈緒の時はトライアドのライブ観たんだっけ。」

P「おう。帰らないんだね。もう諦めの目よ。勝手にしやがれ。」

加蓮「おんなじやつ観るのもつまないだろうし、映画観ない？奏からお薦めされたのがあるんだ。」

P「あれ!?まともだ!やった!」

P「いいね!どういうやつ?」

加蓮「スプラッター!女たらしの男が惨たらしく拷問されて苦しむ姿をたっぷり二時間観れるんだって!」

P「雰囲気ぶち壊しだよ。」

加蓮「あ、ごめん、これ小梅ちゃんからお薦めされたやつだった。今日観るのはこっち。はい。」

P「ふむ。サスペンスか?」

加蓮「そう!三股をかけたクズ男が惨殺されて、彼女だった三人の女性の誰が犯人か

を推理するやつね。」

P 「雰囲気壊しパート2。」

加蓮 「因みに犯人は全員。」

P 「ネタバレ助からない。」

P 「いや、待てや。」

加蓮 「どしたの？」

P 「当てつけか？」

加蓮 「何が？」

P 「いや……気のせいかな。」

加蓮 「そうだよ女たらし。」

P 「キレそう。当たってんじやん。」

加蓮 「アタシに拳であたるのはダメだよ。」

P 「やらんわ。言葉遊び好きね、キミ。」

加蓮 「女遊びばっかりしてるプロデューサーさんよりはマシでしょ。」

P 「してねえよ。」

加蓮 「してるよ。」

P 「誰と。」

加蓮 「トライアド。」

P 「業務で関わってるだけだが!？」

加蓮 「え……義務感なの……?」

P 「いや、心の底から好きだぞ。」

加蓮 「結婚だね。」

P 「無敵か??？」

加蓮 「敵は本能寺にあり!……って最近授業でやった。そういう事?」

P 「どういう事だよ。お前の敵は本能だよ。」

加蓮 「友達だが?」

P 「そんな悪い子と付き合うのはやめなさい。」

加蓮 「付き合ってるのはプロデューサーさんじゃん。」

P 「ダブルミーニングやめろ。」

加蓮 「やめられないとまらない。」

P 「うるせえぞカツパ。」

加蓮 「また髪の話?」

P 「何でだよ。」

加蓮 「ごめんね。辛いよね。」

P 「意味不明だが俺をバカにしたのは分かる。死のうか。」

加蓮 「過激な思想じゃん。」

P 「さつきまで拷問とか惨殺って単語を連発してたのは誰ですか？」

加蓮 「俺！俺?!俺俺俺俺！」

P 「濡れたまんまでイクな。」

加蓮 「きも。」

P 「今のは確かにキモかった。ごめん。」

加蓮 「いいよ。」

P 「ありがとう。」

加蓮 「そのかわり映画ちゃんと一緒に観てよ？」

P 「……………」

P 「はいはい。」

映画終了後

P 「男って最低だな。」

加蓮 「自分の性別忘れたの？まあそんなツルツル頭ならしょうがないか。」

P 「女って最低だな。」

加蓮 「主語がデカイ。」

P 「加蓮って最低だな。」

加蓮 「うえくん(泣)」

P 「泣くな!!男だろ!？」

加蓮 「女ですが?!？」

P 「主語がデカイ。」

加蓮 「デカくないでしょこれは。」

P 「じゃあ小さいんですか？」

加蓮 「胸はデカイけど。」

P 「だから何でそういう話になるんだ……」

加蓮 「需要と供給。」

P 「お前が経済学を語るな。」

加蓮 「うえくん(泣)」

P 「無限ループ!?!？」

加蓮 「疲れた。寝よ。」

P 「唐突。」



加蓮 「ベッドインするね。」

P 「間違っていないけど間違ってる言葉の使い方やめて。」

加蓮 「ほら、いこ！」ズルズル

P 「行かないからな!？」

P 「いや力強ッ！バキかよ!？」

P 「くっ……でもッ！俺は負けない!!」

P 「負けました。」

加蓮 「雑魚じゃん。可哀想。」

P 「誰のせいだよ。」

加蓮 「香水。」

P 「やめろ。」

加蓮 「責任転嫁は良くないよね。誰のせいでもない。」

P 「一個前に言った事を思い出せよ。」

加蓮 「やめろ。」

P 「殺すぞ。」

加蓮 「ヤンデレも受け止める覚悟です。」

P 「こわ。」

加蓮 「恐怖は無理解から生じるモノ。さあアタシを理解して。」 ガバツ

P 「ガバツじゃねえよ。己を思い出せアイドル。」 パンツ

加蓮 「DVだ！」

P 「またその流れやるんですか。」

加蓮 「ごめんなさい。」

P 「許す代わりに一人で寝ろ。そして二度と口を開くな。」

加蓮 「キスの暗喩？」

P 「想像力無限大かよ。」

加蓮 「性（正）の発散。」

P 「上手くねえよ。」

加蓮 「キスが？」

P 「いや、それは上手いが!？」

加蓮 「え……あ、相手いるんだ……」

P 「露骨に落ち込むくらいなら訊くなよ。」

加蓮 「誰……?？」

P 「嘘だよ。いる訳ないだろ。」

加蓮 「それはそれでなんか悲しいね（笑）」

P 「そろそろキミの頸動脈を切ってもいいかな。」

加蓮 「いいよ。」

P 「うーん、この。」

加蓮 「永遠の眠りをプロデューサーさんから貰えるなんてそれ以上の幸福が有り得ようか、いやない。」

P 「反語するな。」

加蓮 「彼の言う事を聞かない事があるうか、いやない。」

P 「おやすみ。」

加蓮 「待つて。」

加蓮 「寝ないですよ。ねえ。起きて。」

加蓮 「まだ話そうよ。ふざけてごめんね。」

加蓮 「ねえ……あれ？」

加蓮 「ホントに寝てるじゃん!？」

×

次の日、事務所にて

加蓮「おはよー！凜！奈緒！良い朝だね！」

奈緒「え？ああ、うん。なんか凄い元気だな。」

凜「……………」

凜「加蓮まさか…………越えた？」

奈緒「!?」

加蓮「まだ。すぐ寝られた。」

奈緒「待って待って待って！ん!?どういう事だ!?」

凜「プロデューサーの家の匂いが加蓮からする。そういう事ですよ。」

加蓮「犬じゃん。」

凜「キレそう。」

奈緒「…………つまり加蓮は昨日、プロデューサーさんの家に居たと…………？」

加蓮「そう！お泊まり！」

奈緒「は、破廉恥だ！」

加蓮「奈緒がそれを言うんだ……」

凜「普通私が言うところだと思う。」

奈緒「ごめん。」

加蓮「いいよ。言い訳に出来たし。」

奈緒「おい。」

加蓮「さて、次は凜だね。」

凜「え？」

奈緒「待って待って。話が早くないか？」

加蓮「もう諸々はプロデューサーさんに通しておいたよ！」

P『かかってこい。皮を剥いで装備品にしてやる。』

加蓮「だって。大歓迎されてる。」

奈緒「加蓮は一先ずお医者様に脳を見てもらおうな。」

凜「あー……じゃあ、まあ、折角だしお言葉に甘えて。」

奈緒「嘘だろ。唯一の良心が。」

凜「それでもなくない？」

奈緒「確かにそうでもなかった。」

凜「え、今私の事馬鹿にした？」

奈緒「怒りの沸点が低すぎる。エタノールかよ。」

凜「難しい言葉で煙に巻くのは止して。」

加蓮「嘘……奈緒、煙……奈緒がタバコを……？」

奈緒「吸ってない！」

凜「未成年喫煙はダメだよ。淫行もね。」

奈緒「その注釈いらないだろ。」

加蓮「というか凜もやっちゃダメだからね。」

凜「分かってるって。大丈夫。」

凜「……………大丈夫。」